

やま もと にし だいら い せき
山 本 西 平 遺 跡

1998年3月

長野県飯田市教育委員会

やま もと にし だいら い せき
山 本 西 平 遺 跡

1998年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市山本地区は飯田市街地の南西部、木曾山脈の前山の麓に位置し、川沿いの平坦地こそ少ないが、比較的広い耕地が広がっています。また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えることが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることもやむを得ないものといえましょう。

下伊那地方事務所は、平成7年度から山本地区に農道の新設を計画しました。農道を建設して農業の近代化に対応することは、車が欠くことのできない交通手段であることを考えれば、必要な事業といえます。しかし、当該事業地には山本西平遺跡をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、工事実施によって壊されてしまうおそれができました。そこで、次善の策ではありますが、工事実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査成果は本文で述べられているとおりでありますが、調査で得られました様々な知見は、これから地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご理解とご協力をいただいた下伊那地方事務所と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さんほか関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、ここに発掘調査報告書が刊行できることに対して厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

1. 本書は県単農道整備事業山本地区工事に先立って実施された、飯田市山本「山本西平遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成7・9年度に現場作業、平成9年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施に当たり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業に当たり、遺跡略号としてYNDを一貫して用いた。なお、遺跡の中心地番である数字を以下により略号に統けて付した。第Ⅰ地区 - 4454-1、第Ⅱ地区 - 2940、第Ⅲ地区 - 2936、第Ⅳ地区 - 2945
6. 本報告書では以下の遺構番号を使用している。堅穴住居址 - SB、掘立柱建物址 - ST、溝址 - SD、土坑 - SK、その他 - SX
7. 本報告書の記載順は住居址を優先した。遺構図は本文とあわせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
8. 土層の色調については、「新版標準土色帖」の表示に基づいて示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により山下誠一が行った。
10. 本書の編集と執筆は調査員の協議により山下誠一が行った。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書の土器実測図で示した網点は、施釉陶器の釉薬部分を表している。
13. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序

例 言

I 経 過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	2
1) 平成 7 年度調査	2
2) 平成 9 年度調査	2
3. 調査組織	2
1) 調 査	2
2) 事務局	3
II 遺跡の環境	5
1. 自然環境	5
2. 歴史環境	5
III 調査結果	9
1. 調査の方法と概要	9
2. 遺構と遺物	9
1) 第 I 地区	9
(1) 基本層序	9
(2) 竪穴住居址	10
(3) 掘立柱建物址	11
(4) 溝 址	12
(5) その他の遺構	14
(6) 遺構外出土遺物	17
2) 第 II 地区	17
(1) 基本層序	17
(2) 竪穴住居址	17
(3) 掘立柱建物址・櫛列	20
(4) 溝 址	21
(5) その他の遺構	22
(6) 遺構外出土遺物	23
3) 第 III 地区	34
(1) 基本層序	34
(2) 掘立柱建物址	35
(3) その他の遺構	36

(4) 造構外出土遺物	37
4) 第IV地区	44
(1) 基本層序	44
(2) 溝 壁	46
(3) その他の造構	46
(4) 造構外出土遺物	47
IV　まとめ	51
報告書抄録	95

挿 図 目 次

挿図1 山本西平遺跡位置図	4
挿図2 山本西平遺跡調査位置図及び周辺図	7
挿図3 基準メッシュ区画及び調査位置図	8
挿図4 第I地区基本層序	9
挿図5 第I地区造構全体図	10
挿図6 S B 0 1	11
挿図7 S T 0 1・S D 0 5	12
挿図8 S D 0 1	12
挿図9 S D 0 2	13
挿図10 S D 0 3・0 4	13
挿図11 S K 0 1	14
挿図12 S X 0 1	14
挿図13 第I地区柱穴・穴(1)	15
挿図14 第I地区柱穴・穴(2)	16
挿図15 第II地区基本層序	17
挿図16 第II地区造構全体図	18
挿図17 S B 0 2	19
挿図18 S B 0 3	19
挿図19 S T 0 2	20
挿図20 S T 0 5・S D 0 7	21
挿図21 S D 0 6	22
挿図22 S K 0 2～0 9	24
挿図23 S K 1 0～1 6	25
挿図24 第II地区柱穴・穴(1)	26
挿図25 第II地区柱穴・穴(2)	27
挿図26 第II地区柱穴・穴(3)	28

挿図27	第Ⅱ地区柱穴・穴(4).....	29
挿図28	第Ⅱ地区柱穴・穴(5).....	30
挿図29	第Ⅱ地区柱穴・穴(6).....	31
挿図30	第Ⅱ地区柱穴・穴(7).....	32
挿図31	第Ⅲ地区遺構全体図.....	33
挿図32	第Ⅲ地区基本層序.....	34
挿図33	S T 0 3	34
挿図34	S T 0 4	35
挿図35	S K 1 7 ~ 2 4	38
挿図36	S K 2 5 ~ 2 9 + 3 4 + 3 5	39
挿図37	第Ⅲ地区柱穴・穴(1).....	40
挿図38	第Ⅲ地区柱穴・穴(2).....	41
挿図39	第Ⅲ地区柱穴・穴(3).....	42
挿図40	第Ⅲ地区柱穴・穴(4).....	43
挿図41	第Ⅳ地区遺構全体図.....	44
挿図42	S D 0 8	45
挿図43	S K 3 0 ~ 3 3	47
挿図44	第Ⅳ地区柱穴・穴(1).....	48
挿図45	第Ⅳ地区柱穴・穴(2).....	49
挿図46	第Ⅳ地区柱穴・穴(3).....	50

図 版 目 次

第1図	第Ⅰ地区出土遺物.....	53
第2図	第Ⅰ・Ⅱ地区出土遺物.....	54
第3図	第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区出土遺物.....	55
第4図	第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区出土古銭.....	56
第5図	第Ⅱ・Ⅲ地区出土鉄製品.....	57

写 真 図 版 目 次

図版1	S B 0 1 S B 0 1 炉址.....	59
図版2	S D 0 1 (南東から) S D 0 1 (北西から) S D 0 2 (南東から) S D 0 2 (北西から)	60
図版3	S D 0 3 + 0 4 (南東から) S D 0 3 + 0 4 (北西から) S D 0 5 (南東から) S D 0 5 (北西から)	61
図版4	S T 0 1 S K 0 1	62

図版5	S X 0 1 第I地区南西部柱穴	63
図版6	第I地区全景（南西から） 第I地区全景（北東から）	64
図版7	第I地区全景（上空から） 第I地区全景（斜め上空南東から）	65
図版8	S B 0 2 S B 0 3	66
図版9	S T 0 2 S D 0 6	67
図版10	S D 0 7 (東から) S D 0 7 (西から)	68
図版11	S K 0 2 S K 0 3 S K 0 4	69
図版12	S K 0 5 S K 0 6 S K 0 7	70
図版13	S K 0 8 S K 0 9 S K 1 0	71
図版14	S K 1 1 S K 1 2 S K 1 3	72
図版15	S K 1 4 S K 1 5 S K 1 6	73
図版16	第II地区北部全景（北から） 第II地区北部全景（南から）	74
図版17	第II地区南部全景（北から） 第II地区南部全景（南から）	75
図版18	第II地区南部全景（上空から） 第II地区北部全景（上空から） 第II地区北部全景（斜め上空東から）	76
図版19	S T 0 3 (北から) S T 0 3 (南から)	77
図版20	S T 0 4 (東から) S T 0 4 (南から)	78
図版21	S K 1 7 S K 1 8 S K 1 9	79
図版22	S K 2 0 S K 2 1 S K 2 2	80
図版23	S K 2 3 S K 2 4 S K 2 5	81
図版24	S K 2 6 S K 2 7 S K 2 8	82
図版25	S K 2 9 S K 3 0 S K 3 1	83
図版26	第III地区北部全景（北から） 第III地区北部全景（南から）	84
図版27	第III地区南部全景（北から） 第III地区南部全景（南から）	85
図版28	第III地区南部全景（上空から） 第II地区南部全景（斜め上空東から）	86
図版29	S D 0 8 (東から) S D 0 8 (西から)	87
図版30	S K 3 0 S K 3 1 S K 3 2	88
図版31	S K 3 3 第II・IV地区全景（南から）	89
図版32	第IV地区全景（南から） 第II地区全景（北から）	90
図版33	第IV地区全景（上空から） 第II・IV地区全景（上空から）	91
図版34	第II・IV地区全景（斜め上空東から） 第II・III・IV地区全景（斜め上空東から）	92
図版35	S B 0 1 深鉢 S B 0 1 横刃型石器 S K 2 2 尖頭器 S K 2 2 尖頭器裏面 第I・II・III地区出土古銭 第II地区遺構外出土鐵錢	93
図版36	重機による調査区拡張スナップ 調査スナップ	94

I 経過

1. 調査に至るまでの経過

下伊那地方事務所土地改良課は、飯田市山本地区に新設の農道を整備することを計画した。計画路線の延長は3kmにも及び、複数の埋蔵文化財包蔵地を通過することが予想された。そこで、平成6年9月29日に、長野県教育委員会文化課・下伊那地方事務所土地改良課・飯田市教育委員会社会教育課の三者による保護協議を実施した。その結果、今回の計画路線内に山本地区の埋蔵文化財包蔵地山本・原畠・カニ田・赤羽原・湯川遺跡がかかることが判明した。そこで、遺跡の状況を確認するために試掘調査を実施し、本調査の可否を判断することとした。なお、試掘調査および発掘調査の日程・費用については、事業の進捗状況を見極めながら、下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整をしていくことが確認された。

山本西平遺跡の試掘調査は、遺跡中央部を継続する市道の北側と南側で2回に分けて実施した。南側部分は、湯川・赤羽原・カニ田遺跡とともに平成7年3月6日から3月15日にかけて実施した。その結果、湯川遺跡と山本西平遺跡の一部に遺構・遺物が認められ、その他は遺跡範囲外であった。そこで、平成7年度調査として湯川遺跡と山本西平遺跡の一部を本調査の対象として協議を進めていくこととなつた。

平成7年度当初から山本西平遺跡の本調査の時期と費用について下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整を進め、平成7年5月10日付で発掘調査の委託契約書を取り交わした。発掘調査が終了した平成7年7月から、市道北側部分の試掘調査についての協議を進め、平成7年10月30日付で委託契約書を取り交わした。

山本西平遺跡の北側部分の試掘調査は、山本・原畠遺跡（一部）とともに平成7年12月1日から12月8日にかけて実施した。山本西平遺跡では遺構・遺物が認められて発掘調査が必要と考えられた。そこで、発掘調査及び整理作業についての協議を進め、平成9年度で発掘調査を実施し、整理作業を実施して報告書を刊行することとなった。なお、原畠遺跡の残り部分の試掘調査は平成8年12月に実施し、遺構・遺物は認められず、拡張しての調査は不要と判断した。

平成9年度当初から、市道北側部分の調査と費用について下伊那地方事務所と飯田市教育委員会の二者による協議を重ね、平成9年5月7日付で委託契約書を取り交わした。発掘調査が終了に近づいた7月になって、当初の現地作業終了日が若干延びることが予想されたのと、整理作業の費用の見通しがたつたことにより、契約変更の手続きを進めた。平成9年7月7日付で、整理作業・報告書刊行を含めた変更委託契約書を取り交わした。

2. 調査の経過

1) 平成 7 年度調査

平成 7 年 5 月 18 日から、重機を導入して調査区を拡張した。調査区が狭く限定されたため、ダンプカーを使って近くの用地内に土を搬出しての作業となった。

湯川遺跡の一部作業が終了した平成 7 年 6 月 12 日から作業員を使っての調査を開始した。堅穴住居址・溝址等の掘り下げを済ませ、並行して写真撮影・測量等の調査を進めた。6 月 12 日には作業員を使っての作業が終了する。その後、炉址断ち割りや委託による上空写真撮影・遺構実測作業を実施した。

現場作業が終了後、図面・写真等の基本的整理を実施し、平成 8 年 3 月 8 日付で発掘調査の実績報告書を提出した。

2) 平成 9 年度調査

用水路や簡易水道が埋設された箇所がありかつ調査の廃土を用地内で処理しなければならないことから、連続して広い範囲の調査区が設定できなかった。よって、3 箇所に分かれた調査区となった。平成 9 年 5 月 7 日に、第Ⅱ 地区の半分程の調査区を重機により拡張して、5 月 13 日から作業員を使っての調査を開始した。堅穴住居址・掘立柱建物址・柱穴等の調査を済ませ、並行して写真撮影・遺構実測作業を行った。

6 月 2 日から廃土の返しと調査区の拡張を 2 台の重機で実施し、6 月 9 日には作業員を使っての作業を再開する。掘立柱建物址・溝址・柱穴等の調査を済ませ、並行して写真撮影・遺構実測作業を行った。

北側調査区の一部が残ったため、7 月 9 日に重機を使った調査区の拡張を実施し、7 月 15 日には作業員を使っての調査を開始した。調査区が限定されたため、作業員の人数を少なくしての作業となつたが、7 月 25 日には現場におけるすべての作業が終了した。

その後、飯田市考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物実測・写真撮影作業、第 2 原図の作成・トレース・版組等を行い、原稿を執筆して本発掘調査報告書を作成した。

3. 調査組織

1) 調査

調査担当者 佐々木嘉和 山下 誠一

調査員 吉川 豊 馬場 保之 吉川 金利 福澤 好晃 下平 博行

伊藤 尚志 上沼 由彦 (県派遣職員: 平成 9 年 3 月 31 日まで)

鳴海 紀彦 (平成 9 年 7 月 1 日から)

作業員 新井 幸子 池田 幸子 伊東 裕子 井上 恵資 井口 邦昭

牛山きみえ 関島 豆 金井 照子 木下 貞子 木下 千秋

木下 義男	小平不二子	小林 千枝	坂下やすゑ	島崎美保江
島岡美恵子	菅沼和加子	鈴木 重雄	高木 純子	滝上 正一
竹村 和子	竹村 定満	竹本 常子	塙原 次郎	中平けい子
中野満里子	中野 充夫	服部 光男	林 達郎	林 員子
林 ひとみ	林 政人	久田 誠	久田きぬゑ	福沢 幸子
福沢 育子	福本 静雄	福本まさ志	福沢 誠	細田 七郎
細田 光彦	牧内喜久子	牧内 八代	松井 明治	松下 光利
松田 猛	松村かつみ	南井 規子	森山 律子	森藤美知子
山田 康夫	吉川 和夫	吉川紀美子		

2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課（平成8年6月30日まで）

横田 穆（社会教育課長）

小林 正春（女性 文化係長）

吉川 豊（女性 文化係）

山下 誠一（女性 女性）

馬場 保之（女性 女性）

吉川 金利（女性 女性）

福澤 好晃（女性 女性）

下平 博行（女性 女性）

伊藤 尚志（女性 女性）

岡田 茂子（女性 社会教育係）

飯田市教育委員会博物館課（平成8年7月1日から）

矢沢 与平（博物館課長、平成9年3月31日まで）

小畠伊之助（男性、平成9年4月1日から）

小林 正春（女性 埋蔵文化財係長）

吉川 豊（女性 埋蔵文化係）

山下 誠一（女性 女性）

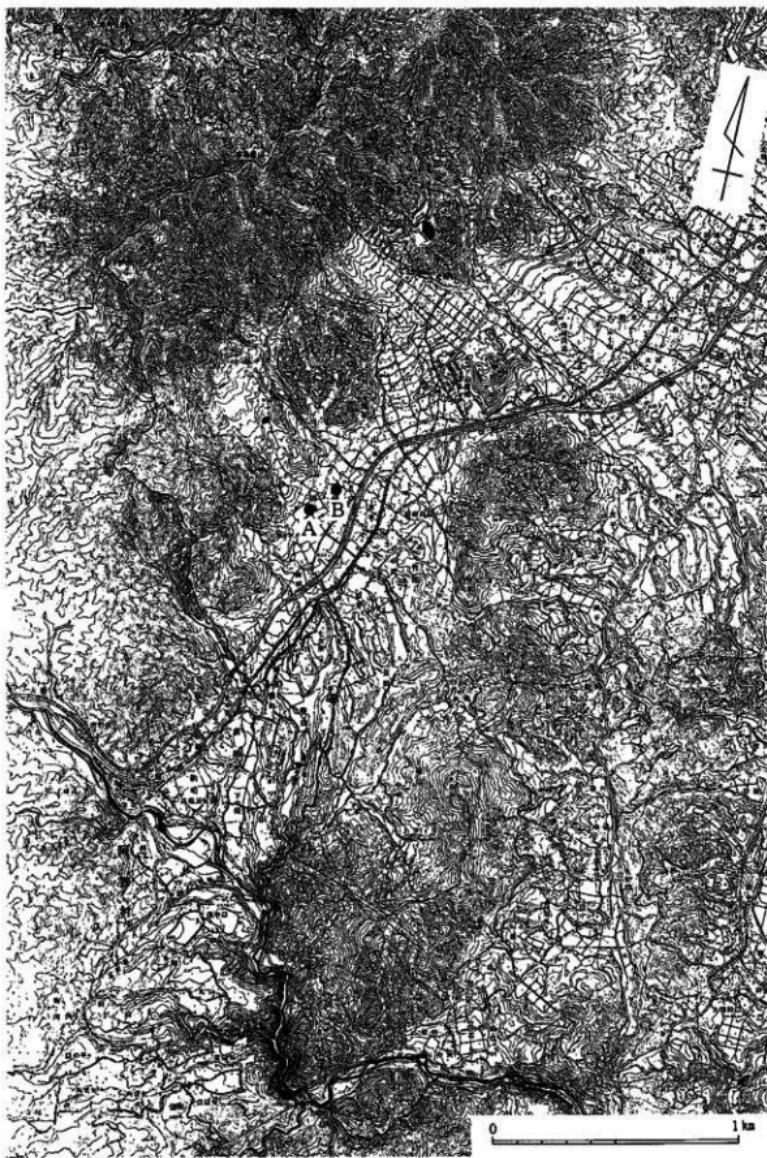
馬場 保之（女性 女性）

吉川 金利（女性 女性）

福澤 好晃（女性 女性）

伊藤 尚志（女性 女性）

牧内 功（男性 庶務係）



挿図1 山本西平遺跡位置図（A：第Ⅰ地区 B：第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区）

II 遺跡の環境

1. 自然環境

山本地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は飯田市伊賀良地区、東側は飯田市三徳地区に、南側は下伊那郡阿智村に接する。

飯田市は赤石山脈と木曾山脈にはさまれた伊那谷の南端に当たり、両山脈の間を天竜川が南流する。地形的には天竜川に平行する河岸段丘を特徴とするが、両山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成された結果であり、複雑な段丘地形を呈している。飯田市の大半は、下伊那郡松川町から飯田市の国指定名勝である天竜峡までの細長い飯田盆地にある。

山本地区の場合、飯田盆地とは二ツ山・城山・水晶山などの丘陵によって隔たった阿智盆地の一部である。この両盆地を分ける丘陵は、緩やかな曲線を画きながら南北に並び、この丘陵と木曾山脈の山麓にはさまれて、ほぼ南北に縦長く続くのが阿智盆地である。木曾山脈前山から阿智川に流れ出す湯川・箱川や天竜川支流の久米川によって形成された扇状地が発達しているが、地区北側の大明神原を除いては、規模は大きくない。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は、現在は堆積作用より浸食作用に転じているが、浸食力は弱く、開析谷の規模は比較的小さい。台地状の小丘陵として残っているところが各所に分布し、南東の方向にのびている。山麓の扇状地や小河川に面したところに耕地が展開し、集落も国道153号沿いの街村を除いては、同様な立地を呈している。近年にいたって、扇状地の上部や東にのびる台地上や数条に走る断層崖によって生じた崖錐面にも開拓が進み、集落が発達しつつある。

なお、山本地区は飯田市の中では標高が高く、特に冬季の生活環境は厳しいものがある。

山本西平遺跡は飯田市山本地区中央部にあたり、木曾山脈前山から流れ出す赤羽根沢・宮沢川・米川等の小河川によって形成された扇状地上に立地している。総体とすれば東へ緩い傾斜をもっており、扇奥部から扇端部までの範囲を占めている。小地形は複雑にあり、南東部は南東側に傾斜する台地があり、湿地帯をなす小窪地を挟んで中央部から北側は東側に傾斜するやや広い台地となる。ちなみに、平成7年度調査地区は前者、平成9年度調査地区は後者の台地に立地しており、地形的に異なる遺跡立地となる。宮沢川を挟んだ北側は大御堂付近遺跡・山本中平遺跡が隣接し、南側にはカニ田・石子原遺跡があるが、カニ田遺跡は試掘調査の結果から大半が湿地帯であることが確認されている。

2. 歴史環境

山本地区には埋蔵文化財包蔵地が広く分布しているが、これまで発掘調査された遺跡は市内他地区と比べると比較的少ない。そのなかで、中央自動車道西宮線建設に先立つ柳田・山田・石子原遺跡、石子原古墳、工場建設・農道新設に伴う箱川原遺跡、小学校新設による白山遺跡、ほ場整備にかかる高野遺跡、農道新設に先立つ湯川遺跡等の各遺跡がある。

こうした文化財に表された先人達の足跡は旧石器時代までさかのばる。昭和47年に調査された石子原

遺跡のローム層の中から、チョッパー、スクレバー、ショッピング・ツウール等の旧石器前末期と考えられる石器群が出土した（長野県教育委員会1973B）。当初からその位置づけには様々な論議が見られたが、現状では今から28.000年前々後の年代が与えられている。

続く縄文時代では、石子原遺跡での早期押型文土器が最も古い時代のものであり（長野県教育委員会1973A）、白山遺跡（飯田市教育委員会1981）・箱川原遺跡（下伊那誌編纂會1991）・柳田遺跡（長野県教育委員会1973A）・湯川遺跡（飯田市教育委員会1997）等からの中期の堅穴住居址がそれに続く。いずれも狭い範囲での調査にとどまったために、必ずしも全体が明らかになったわけではないが、調査範囲外にさらに多数の堅穴住居址等が存在すると考えられる。出土遺物の面では、箱川原遺跡から出土した顔面付の釣手土器・有孔鍔付土器は注目される。中期に続く後期・晩期の様相は明らかではないが、遺跡が減少する当地方の状況と同様な傾向を示すと考えられる。

弥生時代においては、前期・中期と後期では遺跡立地が異なり、前者は天竜川に近い低位の段丘面を主な生活域としている。後者になると、高位の段丘面や扇状地に遺跡が拡大する。山本地区では堅穴住居址は発見されていないが、各所で後期の集落が営まれていたことは確実である。

古墳は山本地区では11基が確認されているが、現存するものは2基にすぎない。古墳が密集する低位段丘面の座光寺・上郷・松尾・竜丘地区に比べると著しく少なく、隣接する三徳地区と比べても少ない。発掘調査された古墳には石子原古墳があり、墳丘から4基の埋葬施設が検出され、出土遺物から6世紀初頭の年代が与えられている（長野県教育委員会1973A）。また、隣接する石子原遺跡からは3基の方形周溝墓が発見された。時期を決定する遺物に欠け、その時期的な位置づけを決定するには困難が伴うのであるが、古墳との関連を想定して古墳時代に位置づく可能性が高い。周溝墓に関する特筆すべき事項とすれば、2号周溝墓主体部から炭が認められ、その後上郷黒田垣外遺跡で調査した『木炭棺』から見て（上郷町教育委員会1989）、同様な施設であった可能性が高い。また、1号周溝墓からはガラス小玉が出土した。こうした墓域を形成した集落の様相は不明であるが、地区内に存在したことは確実であり、その検出は今後の課題となる。調査された堅穴住居址は、高野遺跡の古墳時代前期に位置づくものが1軒のみである（飯田市教育委員会1989）。

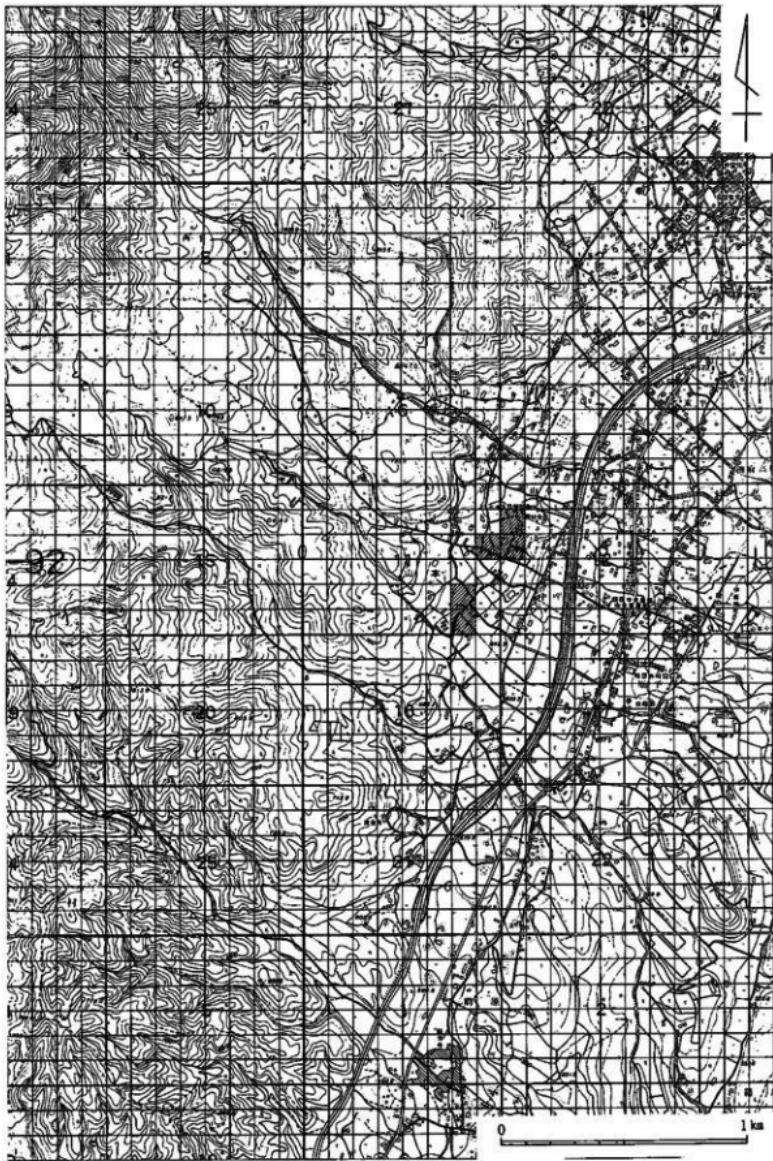
奈良時代については、伊賀良中村地籍にまたがる久米地区の高野遺跡から、その終末に位置づく堅穴住居址・掘立柱建物址・製鉄工房址が調査されている（飯田市教育委員会1989）。これらは遺跡近くにある天平年間創建と寺史にある名刹光明寺との関連が考えられている。他には該期の遺構は調査されておらず、特に広い範囲を占める山本地区の状況は不明である。しかし、隣の阿智村からの経路を考慮すれば、古代東山道が通過していたと考えられ、集落等の存在も予想される。今後の調査によって、この時代の様相もより具体的な姿が明らかになるといえる。

平安時代はその前半については奈良時代と連続的に把握することが可能と考えられる。また、前述した光明寺の国指定の重要文化財に指定されている薬師如来坐像には、胎内に保延六年（1140年）の銘を持っている。地区の平安時代の様相を具体的に示す事項といえる。しかし、前時代と同様に、発掘調査によって現れた具体的な姿はほとんど見られない。

中世においては、久米ヶ城・西平城等山城の築造等が行われている。発掘調査によつては、大塚遺跡から火葬墓群が発見されており、埋葬形態の一端をかいま見ることができる（下伊那考古学会1969）。



挿図2 山本西平遺跡調査位置図及び周辺図



挿図3 基準メッシュ区画及び調査位置

III 調査結果

1. 調査の方法と概要

平成7年度調査地と平成9年度調査地では直線で約300m離れていた。かつ、平成9年度調査では、用水路や簡易水道の埋設により調査区が3カ所に分かれてしまった。よって、それぞれにI～IVのローマ数字を便宜的に付して調査にあたることとした。なお、第I地区は4454-1地番、第II地区は2940地番、第III地区は2936地番、第IV地区は2945地番が中心となる。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャスティックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については『三尋石遺跡 三尋石(II)遺跡』(飯田市教育委員会1996)に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画は挿図3で示したように第I地区はLC92 11-39・47、第II地区はLC92 12-9・17、第III地区はLC92 12-9、第IV地区LC92 11-24である。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

堅穴住居址……………3軒
掘立柱建物址・櫛列………5棟
溝 址……………8本
土 坑……………35基
柱穴・穴……………多数

2. 遺構と造物

1) 第I地区

(1) 基本層序

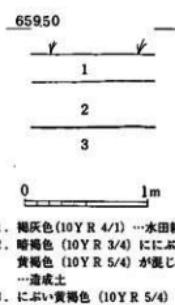
SD05南西側の北西に面する壁面を挿図4で示した。

1層：褐灰色土 (10Y R 4/1)

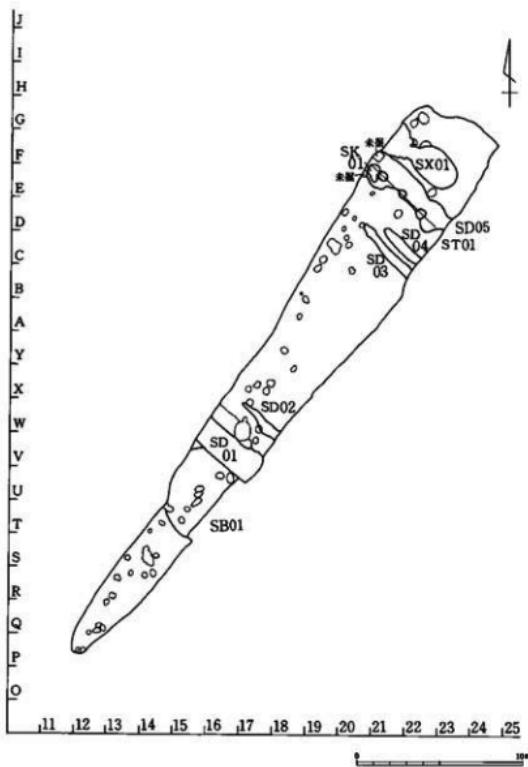
2層：暗褐色土 (10Y R 3/4) ににぶい黄褐色土 (10Y R 5/4) が混じる。

3層：にぶい黄褐色土 (10Y R 5/4)

水田の造成を受けており、1層の水田耕土の下に造土が認められて、本来の堆積を示す箇所はない。遺構検出面は基盤である3層上面で、比較的容易に遺構検出はできた。



挿図4 第I地区基本層序



挿図5 第Ⅰ地区遺構全体図

(2) 穫穴住居址

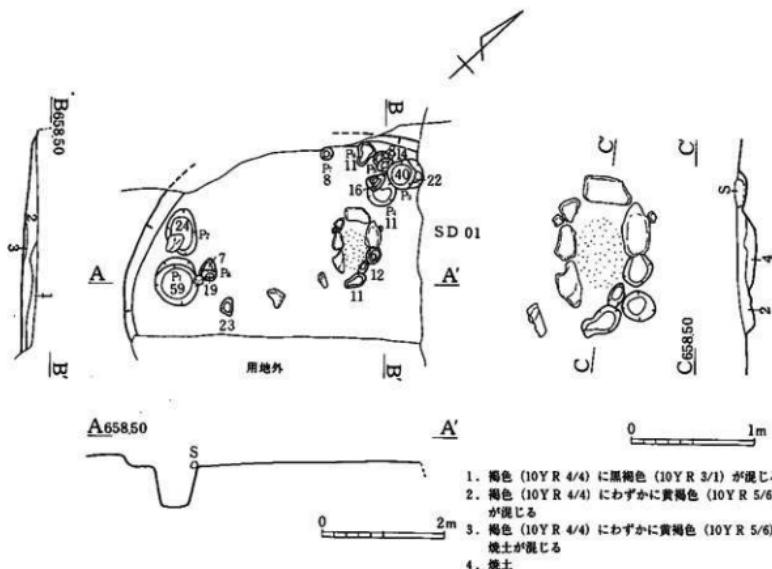
① SB01 (挿図6、第1図、図版1)

遺構 調査区南西部B U15を中心にして検出した。近世のSD01に切られ、南東側が市道建設で造成を受けており全体の1/3程を調査した。規模不明の円形の竪穴住居址で、主軸方向は炉址の位置からN49°Wを示す。壁高は20~9cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はにぶい黄褐色土層で明確に検出されたが、全体に軟らかく不良である。南東側に緩く傾斜していた。主柱穴はP1・P3で、その他の穴で役割を特定できたものはない。炉址は北西壁寄りに位置する石圓炉で、130×80cmの長方形を呈し、石5個が床面上に置かれる。東側の石3個は残っていないが、床面上に穴が確認され、位置は特定できる。底部はわずかに窪んで、焼土が顕著に認められた。

遺物 土器・石器がある。出土量は少なく、顕著な集中箇所は認められなかった。

土器は深鉢(1-1~7)があり、縄文を地文とする文様構成がほとんどを占める。他に、台付土器

(1 - 8) がある。石器は横刃型石器 (1 - 9~14) と石核 (1 - 15) がある。
出土遺物から縄文時代中期後葉に位置づけられる。



挿図 6 SB 01

(3) 捜立柱建物址

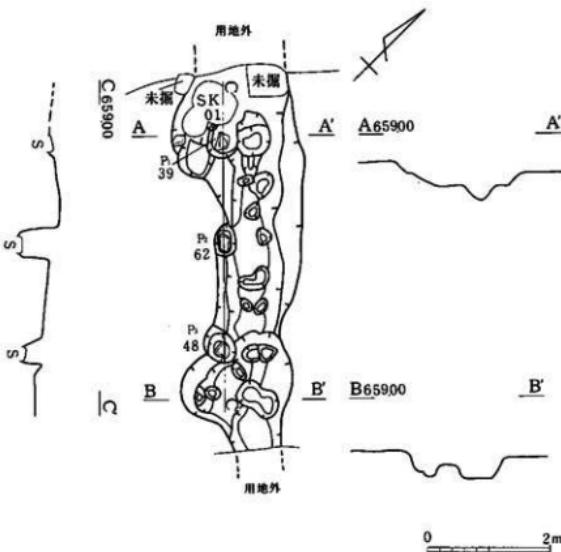
① ST 01 (挿図 7、図版 4)

造構 調査区の北西部 SD 05 の南西側落ち込みの肩部分に、底に石が入れられている柱穴が 3 個等間隔に並び、掘立柱建物址であることが判明した。確認された規模は 3.4m を測るが、北西側・南東側に延長するかは不明である。主軸方向は N46° W を示し、柱間は 164cm を測る。柱掘方の直径は P 1 で 52・P 2 で 48・P 3 で 60cm を測り、深さはそれぞれ 39・48・60cm である。

出土遺物はない。

造構の性格であるが、検出位置や方向から後述する SD 01 と強い関連が考えられる。溝址は何らかの施設の区画のためと想定され、それに付随する塙もしくは門の一部ととらえられる。

SD 01 との関連から近世に位置づけられる。



挿図7 ST01・SD05

(4) 溝 址

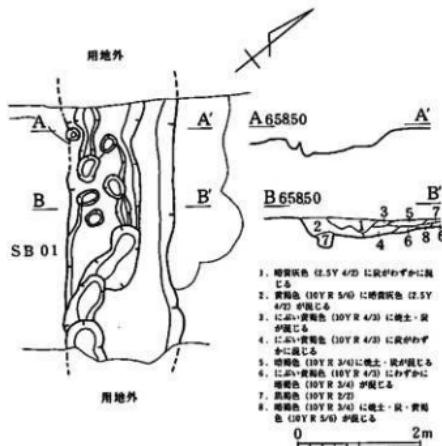
① SD01 (挿図8、第1図、図版2)

遺構 調査区の中央部BU14～BT15

にかけて検出した。調査延長は4.8mで、北西・南東側に延長する。覆土は炭や焼土が混入し、人為的に埋めていると考えられる。幅192～160cm・深さ52～34cmを測り、方向はN52°Wを示す。断面形は基本的に逆台形を呈し、底部は水流によって抉られた箇所が認められる。

遺物 出土遺物は少なく、染め付けの茶碗1点(1-17)・鉄軸の茶碗2点(1-16・18)を図示した。他に、繩文土器深鉢9片・打製石斧1点、近世の灰釉陶器片2点・鉄軸陶器片2点・染付磁器片8点、古銭1点がある。

出土遺物から近世に位置づけられる。



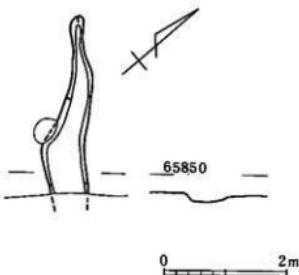
挿図8 SD01

② SD 02 (挿図9、図版2)

遺構 調査区の中央部B V15～B U16にかけて検出した。調査延長は2.8mで、南東側に延長するが市道建設で削平されている。北西側は検出できなくなるが、上層が削平されて残らなかつたと考えられる。幅68～20cm・深さ15～3cmを測り、方向はN47°Wを示す。断面形は逆台形を呈し、覆土は暗褐色土の一層である。

出土遺物はない。

出土遺物がなく、時期・役割等不明である。



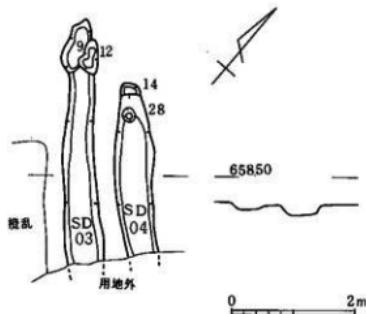
挿図9 SD 02

③ SD 03 (挿図10、図版3)

遺構 調査区の北西部A B19～A A20にかけて検出した。調査延長は4.0mで、南東側に延長するが市道建設で削平されている。北西側は検出できなくなるが、上層が削平されて残らなかつたと考えられる。幅64～40cm・深さ9～4cmを測り、方向はN41°Wを示す。断面形は逆台形を呈し、覆土は暗褐色土の一層である。

出土遺物はない。

出土遺物がなく、時期・役割等不明である。



挿図10 SD 03・04

④ SD 04 (挿図10、図版3)

遺構 調査区の北西部A B20～A A21にかけて検出した。調査延長は2.8mで、南東側に延長するが市道建設で削平されている。北西側は検出できなくなるが、上層が削平されて残らなかつたと考えられる。幅64～52cm・深さ15～12cmを測り、方向はN46°Wを示す。断面形は逆台形を呈し、覆土は暗褐色土の一層である。

出土遺物はない。

出土遺物がなく、時期・役割等不明である。

⑤ SD 05 (挿図7、第1図、図版3)

遺構 調査区の北西部A E20～A B21にかけて検出した。縄文時代のSK 01を切る。調査延長は6.0mで、北西・南東側に延長する。幅176～124cm・深さ41～27cmを測り、方向はN45°Wを示す。断面形は基本的に逆台形を呈し、底部は水流によって抉られた箇所が認められる。

遺物 出土遺物は少なく、鉄軸の短頸壺（1-19）・打製石斧（1-20）・横刃型石器（1-21）を図示した。他に、縄文土器深鉢1片・打製石斧1点・陶器片2点・鉄軸陶器片2点・鉄小片1点がある。

出土遺物から近世に位置づけられる。

(5) その他の遺構

① SK 01 (挿図11、第2図、図版4)

遺構 調査区の北西部AD19で検出し、上面を近世のSD 01に切られる。144×120cmの楕円形を呈し深さ62cmを測る土坑と、84×80cmの楕円形を呈し深さ57cmを測る土坑との重複と考えられる。覆土は暗褐色を呈する。

遺物 縄文土器深鉢片があり、その内5点(2-1~5)を拓影で示した。

出土遺物より縄文時代中期に位置づけられる。



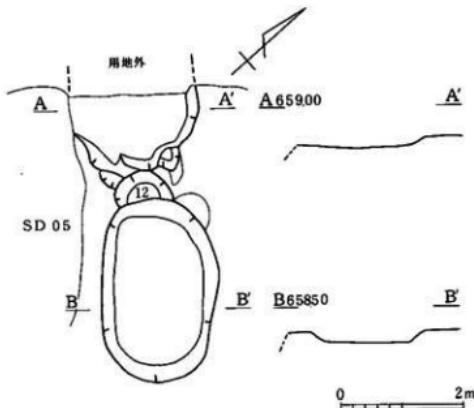
挿図11 SK 01

② SX 01 (挿図12、第3図、図版5)

遺構 調査区の北西端部AD22で土の落ち込みを検出し、その北西側のAE21にも覆土が共通して形態が類似する遺構を確認して、二つの遺構をSX 01とした。前者は、2.9×1.8mの楕円形を呈し、深さは21cmを測る。底部は平坦で、やや緩やかな壁面をなす。後者は、北西側が用地外となり、北東・南西方向の長さが2.2mで、深さ21cmを測る。

遺物 灰釉陶器の小壺(2-6)・横刃型石器(2-7)・鉄器3点がある。

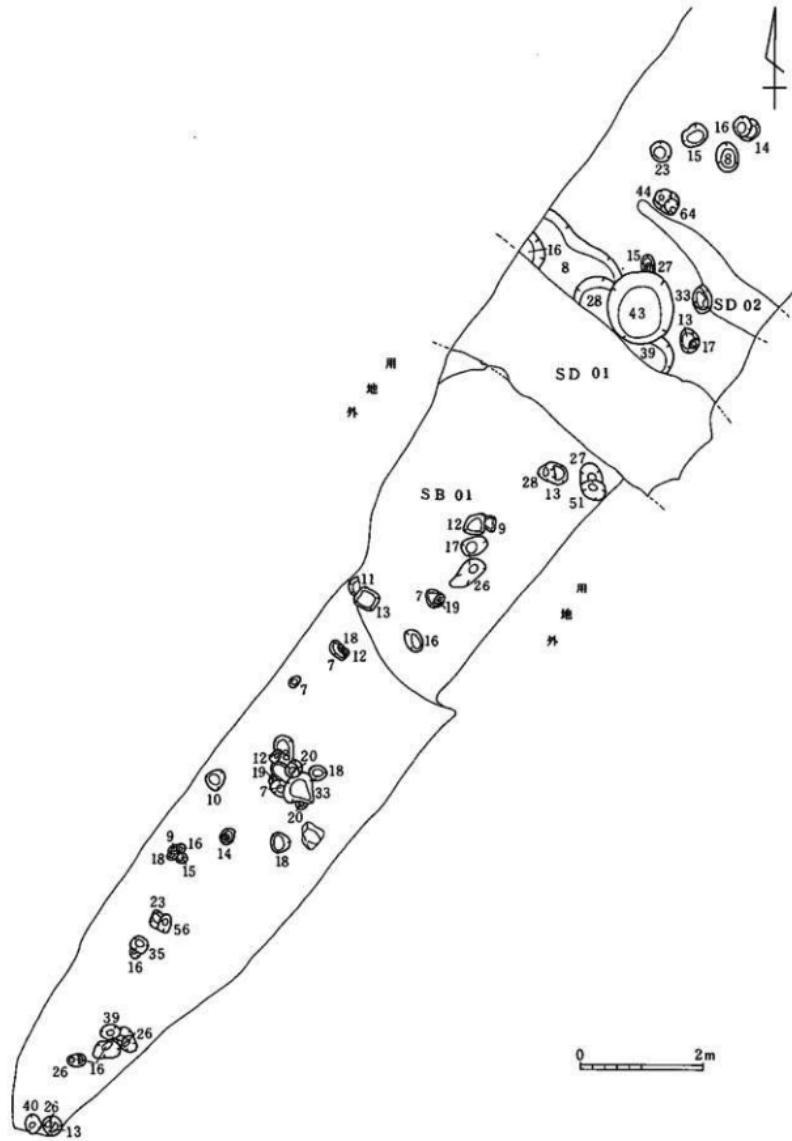
時期を特定できる遺物の出土がないので時期は確定できないが、覆土の状況から見て近世に位置づくと考えられる。



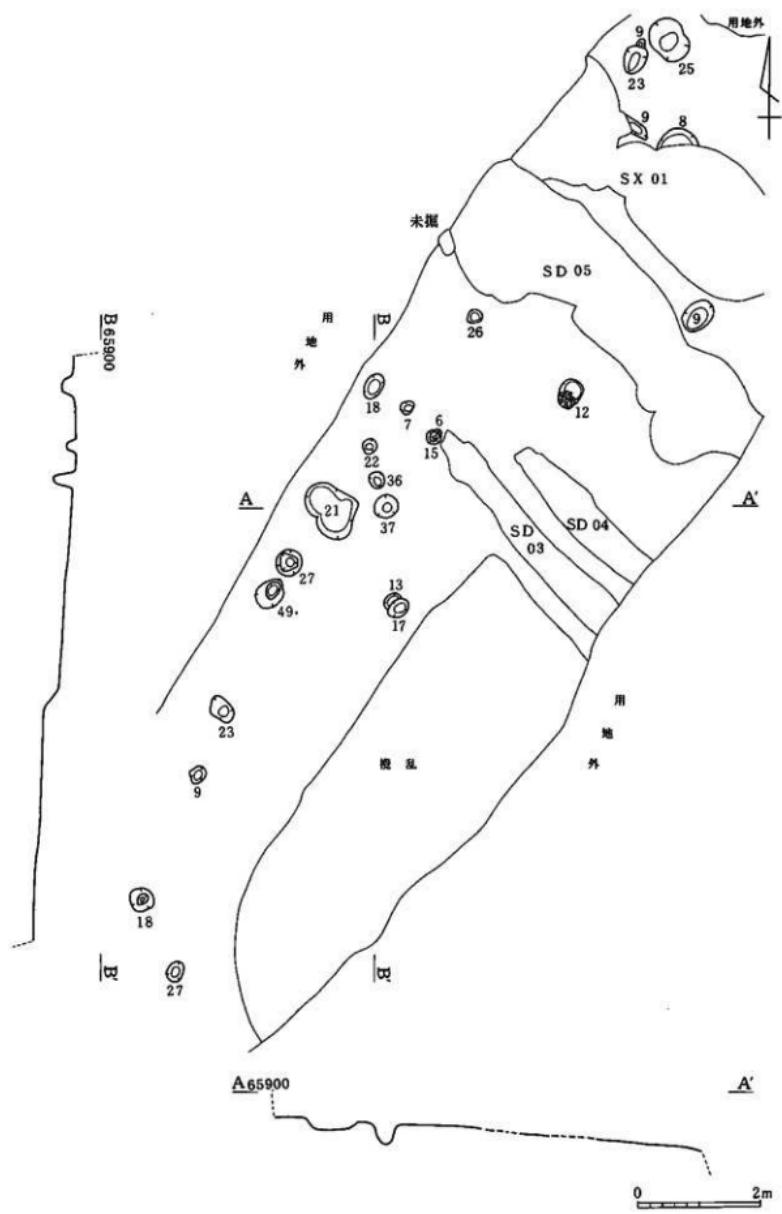
挿図12 SX 01

③ 柱穴・穴 (挿図13、第1図、図版5)

遺構 柱穴・穴をほぼ全域で検出した。調査範囲が限定されたためにまとまりを把握するには至らなかったが、大半が掘立柱建物址の柱掘り方と想定される。もう少し分布状況を細かく見ると、区画溝のSD 05より南西側に集中し、この箇所が居住地域としていたと考えられる。SD 05より北西側は穴



挿図13 第I地区柱穴・穴(1)



挿図14 第I地区柱穴・穴(2)

がわずかにあるのみで居住域外といえる。

遺物 柱穴内から縄文土器片9点・打製石斧1点・黒曜石片2点・カワラケ片1点・中世磁器片1点が出土した。その内、打製石斧(1-22)を図示した。

出土遺物では時期の確定は困難であるが、遺構の状況等から中世から近世に位置づく。

(6) 遺構外出土遺物

遺構に直接無結びつかない遺物には縄文土器・石器と中・近世陶磁器、古銭がある。際だった集中箇所は見られず、層位的に分離はできていない。

縄文土器片51点・打製石斧4点・横刃型石器1点・黒曜石片8点・灰釉陶器片14点・鉄釉陶器片5点・染め付け磁器片30点・すり鉢片6点・鉢片1点・仏龕器1点・陶器片7点・古銭1点がある。灰釉陶器皿1点(2-8)・灰釉陶器茶碗2点(2-9・10)・灰釉陶器仏龕器1点(2-11)・染め付け茶碗1点(2-12)・鉄釉茶碗1点(2-13)・打製石斧2点(2-14・15)・横刃型石器2点(2-16・17)・研磨痕のある刺片(2-18)を図示し、寛永通宝1点(4-1)を拓影で示した。

2) 第Ⅱ地区

(1) 基本層序

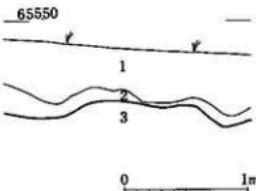
SD 0 7 の北西側の北西に面する壁面を挿図15で示した。

1層：黒褐色土(10Y R 3/2 Sic)

2層：黒褐色土(10Y R 3/2 Sic)ににぶい黄褐色土(10Y R 5/4 CL)が混じる。

3層：にぶい黄褐色土(10Y R 5/4 CL)

1層は畑の耕土である。2層は3層の基盤の土が混入しており、旧耕作による擾乱を受けている。基盤は3層で、暫移層部分が失われているため、遺構検出は容易であった。



1. 黒褐色 (10Y R 3/2 Sic)
2. 黒褐色 (10Y R 3/2 Sic) ににぶい黄褐色 (10Y R 5/4 CL) が混じる
3. にぶい黄褐色 (10Y R 5/4 CL) …基盤

挿図15 第Ⅱ地区基本層序

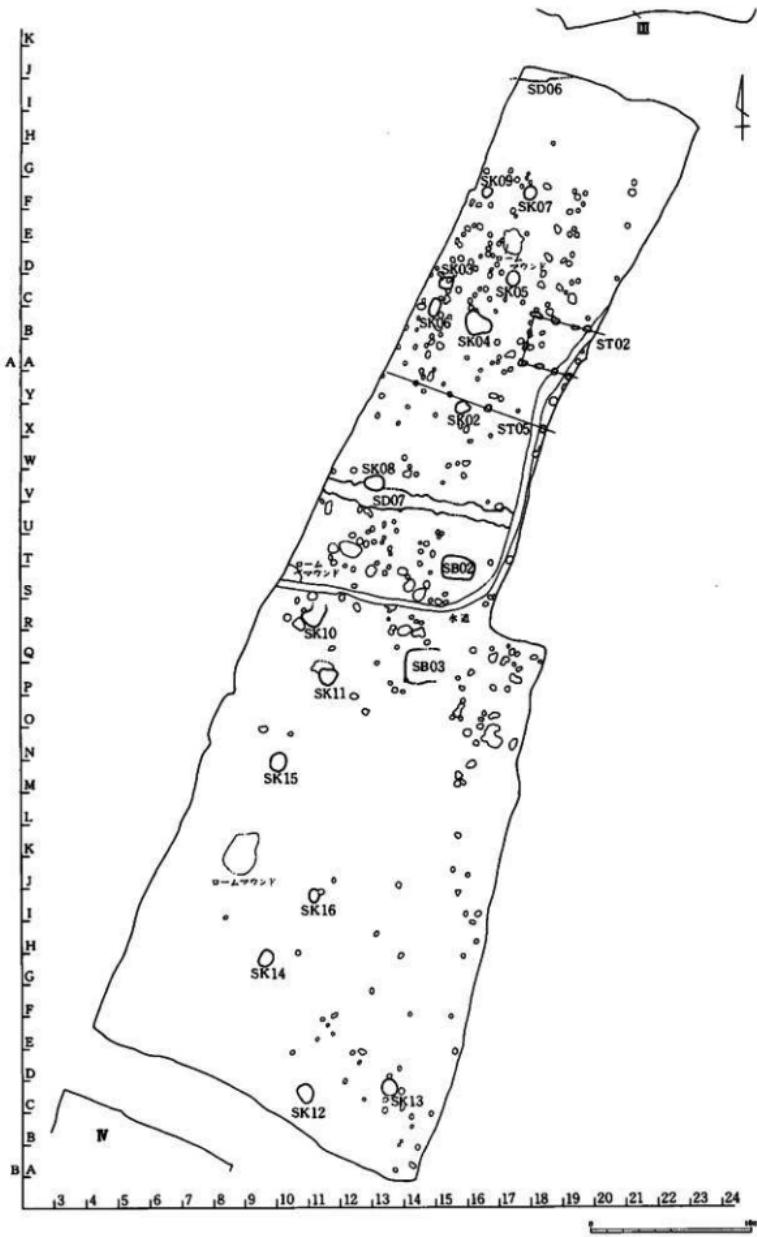
(2) 壁穴住居址

① SB 0 2 (挿図17、図版8)

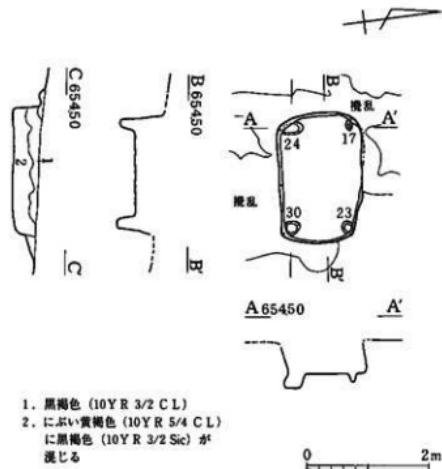
遺構 調査区中央部BR13を中心にして検出し、全体を調査した。2.1×1.3mの隅丸長方形の壁穴住居址で、主軸方向はN 81° Wを示す。壁高は53~37cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はにぶい黄褐色土層で明確に検出され、全体に平坦で堅く良好である。主柱穴はP 1~P 4で、柱掘方はわずかに外傾させて掘られており、柱は内側に傾斜するように立てられたと考えられる。

出土遺物はない。

遺物の出土がないため詳細な位置づけは不可能であるが、遺構の状況から中世に位置づけられる。



挿図16 第II地区遺構全体図



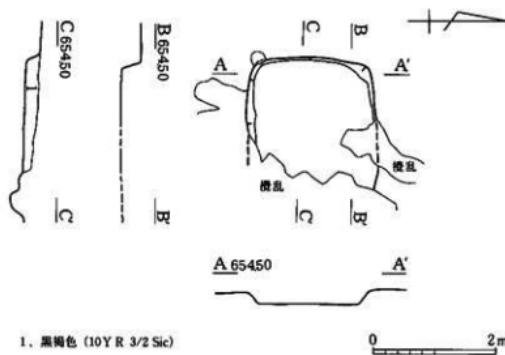
挿図17 SB 02

② SB 03 (挿図18、図版8)

造構 調査区中央部B P12を中心にして検出した。東側が耕作の搅乱を受けており、東・西方向の規模は不明である。南・北方向の規模が2.1mの開丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN89° Wを示す。壁高は25~6cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はにぶい黄褐色土層で明確に検出され、全体に平坦であるが軟らかく不良である。

出土遺物はない。

遺物の出土がないため詳細な位置づけは不可能であるが、造構の状況から中世に位置づけられる。



挿図18 SB 03

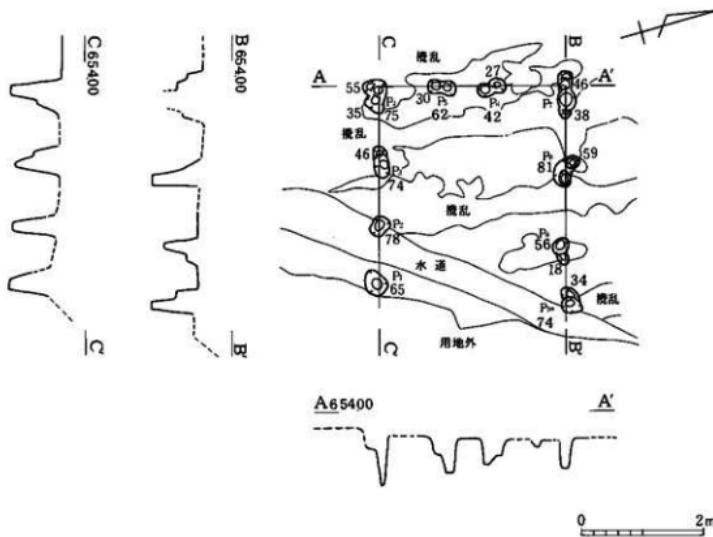
(3) 据立柱建物址・柵列

① S T 0 2 (挿図19、図版9)

遺構 調査区北西部A A16付近で検出した。梁行が3間の据立柱建物址で、北東側が用地外で桁行の軒数は不明である。梁行の規模は3.0mを測り、桁行の規模は不明である。桁行方向はN75°Wを示す。柱間は一定せず、桁行が1.3・0.9m、梁行が1.1・0.8mを測る。柱掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、直径40~24cmを測る。穴の重複が認められ、建て替えが想定される。

出土遺物はない。

出土遺物がなく時期を決定するのは困難が伴うのであるが、遺構や周辺の状況から中世に位置づく可能性が高い。



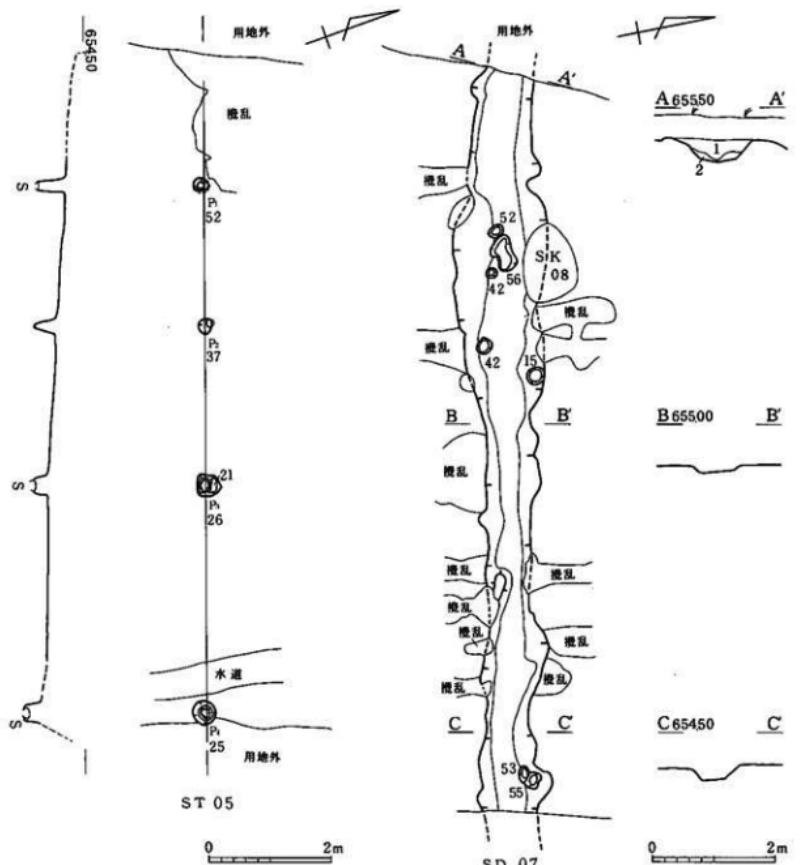
挿図19 S T 0 2

② S T 0 5 (挿図20)

遺構 調査区北西部B X 14を中心にして底に石を入れた柱穴3本と柱穴1本が直線に並び遺構とした。北西・南東の用地外に続くと想定され、規模は不明である。方向はN71°Wを示す。柱間は一定せず、3.7・2.4mを測る。柱掘り方は円形・楕円形・丸みを帯びた方形を呈し、直径36~20cmを測る。遺構の状況から柵列と考えられる。

出土遺物はない。

出土遺物がなく時期を決定するのは困難が伴うのであるが、遺構や周辺の状況から中世に位置づく可能性が高い。



挿図20 ST 05・SD 07

1. 黒褐色 (10YR 3/2 Sic)
2. 黒褐色 (10YR 3/2 Sic) にぼい黄褐色
(10YR 5/4 CL) が混じる

(4) 溝 壴

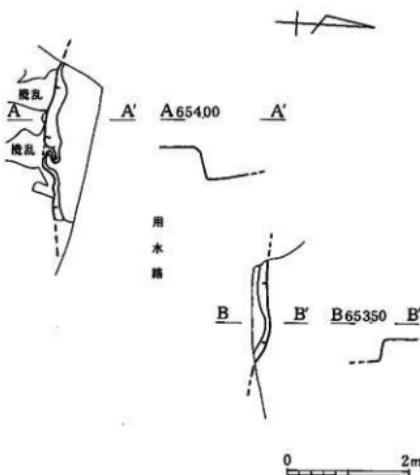
① SD 06 (挿図21、図版9)

遺構 調査区の北端 A 16・17で検出し、第IV地区の南西端 A K17でも同じ覆土の落ち込みを確認して同一遺構と判断した。中間には調査時にも使われていた用水路が通っており、調査範囲は限られたものとなった。幅は推定で3.5m・深さ41~22cmを測り、方向はN 87° Wを示す。断面形は基本的に逆台形を呈し、底部は水流によって抉られた箇所が認められる。

遺物 出土遺物はきわめて少なく、近代陶器片3点が出土したのみである。

第II・IV地区の間にU字溝の用水路が通っており、そうした改修がされる前の用水路と考えられる。

出土遺物から近代以降に位置づけられる。



挿図21 SD 06

② SD 07 (挿図20、図版10)

遺構 調査区の中央部 B U 9～B U 15にかけて検出した。縄文時代の SK 08を切る。調査延長は11.8mで、西・東側に延長する。幅150～76cm・深さ27～8cmを測り、方向はN79°Wを示す。断面形は逆台形を呈し、底にわずかに水が流れた痕跡が認められる。

出土遺物はない。

出土遺物がなく確定した時期を示すのは困難が伴うのであるが、調査箇所全体の様相からみれば、中世に位置づき、区画のための溝と考えられる。

(5) その他の遺構

① 土坑

第II地区に土坑は15基あり、個々の説明は省略して一覧表で示した。
土坑の分布状況は柱穴が集中する北東部にやや集中するが、他に際だったまとまりは認められない。時期は縄文時代と中世のものがあるが、時期を決定できる遺物が出土したものが少ないため、詳細に位置づけることは困難である。しかし、検出時の覆土が中世の柱穴と共に土坑については中世、それ以外は縄文時代とするのが妥当と考えられる。表の時代決定はそうした面も加味して判断してある。

SK 04は何らかのものを埋めた後上面に土坑を掘った地山の土を被せた様子が、土層調査によって確かめられた。底部からは15枚重なった古銭が出土し、紐に通して埋納されたと想定される。土葬墓と考えられる。SK 04の古銭は第4図で示した。開元通宝3点(4-2~4)・成平通宝1点(4-5)・祥符通宝1点(4-6)・天聖元宝2点(4-7・8)・皇宋通宝3点(4-9~11)・元寶通宝1点(4-12)・聖宋元宝(4-13)・淳熙元宝1点(4-14)・至元通宝(4-15)・洪武通宝1点(4-16)である。

S K 1 5 は底から20cm位の部分に石11個が置かれ、その周辺に炭が多量に認められた。焼土も確認されて、この場での火の使用が考えられる。

第1表 第II地区土坑一覧表

番号	検出位置	規模(長/幅/深cm)	形 態	覆土	断面形	出土遺物	時代	備考
0 2	B X 19	92× 72× 33	楕円形	黒褐色	逆三角形	縄文土器片 1	縄文	
0 3	A C 13-14	84× 64× 22	長方形	黒褐色	逆台形		中世	
0 4	A B 14	152× 126× 73	不整形	黒褐色	袋 状	古鏡15・打製石斧 1	中世	
0 5	A C 15	88× 84× 17	円 形	黒褐色	逆台形		中世	
0 6	A B 12-13	108× 64× 38	丸みを帯びた長方形	暗褐色	逆台形	敲打器 1.	中世	
0 7	A F 15-16	80× 72× 40	不整円形	黒褐色	逆台形		中世	
0 8	B V 11	120× 84× 42	楕円形	にぶい黄褐色	楕 状		縄文	
0 9	A F 14	66× 60× 34	不整形	黒褐色	逆台形		中世	
1 0	B R 9	- × 100× 31	不整長方形	暗褐色	皿 状		縄文	
1 1	B P 9	112× 92× 52	楕円形	黒褐色	逆台形		縄文	
1 2	B C 8	112× 95× 32	楕円形	黒褐色	逆台形		中世	
1 3	B C 11	96× 88× 27	円 形	黒褐色	逆台形		中世	
1 4	B G 7	102× 88× 31	楕円形	黒褐色	逆台形	縄文土器片 1	縄文	
1 5	B M 7 - 8	110× 105× 74	円 形	黒 色	コップ状	縄文土器片 4 · 黒曜石片 1	縄文	覆土中に 石・炭
1 6	B I 9	78× 66× 14	楕円形	黒褐色	逆台形		縄文	

② 柱穴・穴

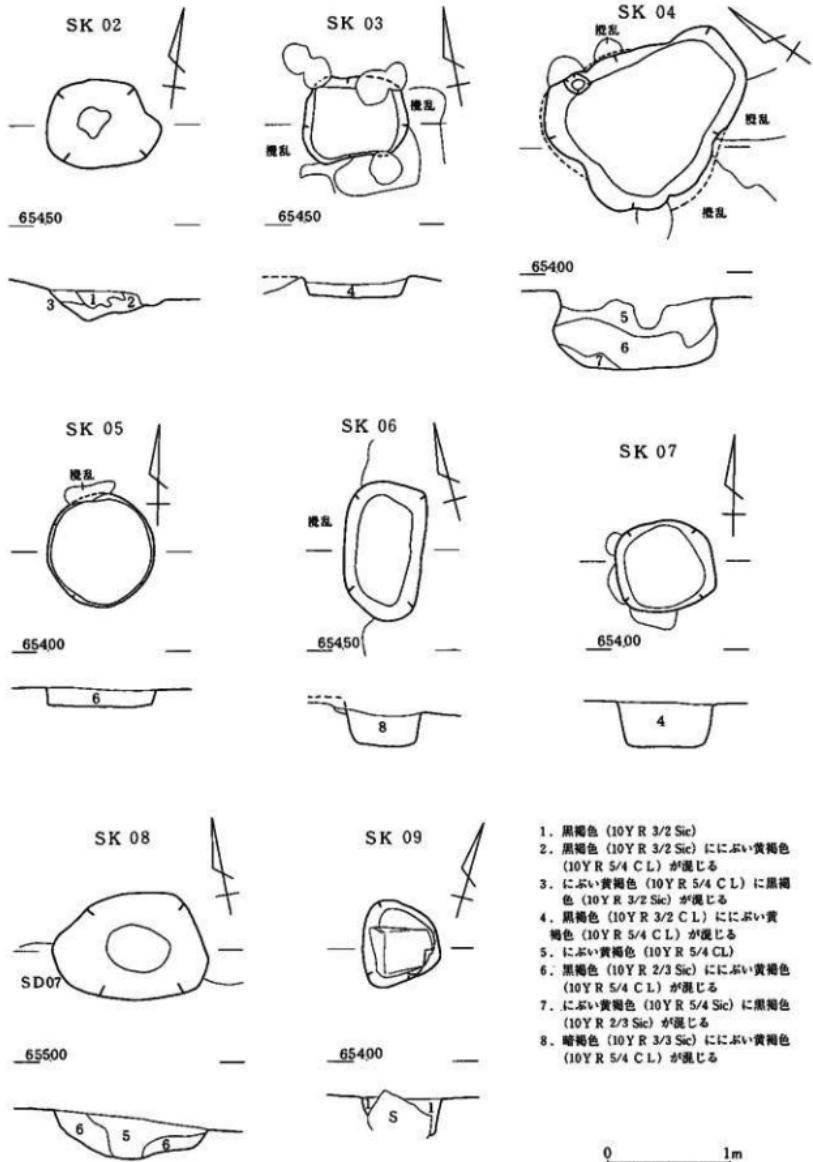
長薯等による耕作の攪乱が縱横に見られ、そこに重なって柱穴が認められた。覆土で区別することはきわめて困難であり、最終的には掘り上がりの遺構状況で判断するしかなかった。よって、把握しきれなかった柱穴の存在も考慮に入れなければならないが、大半が把握できたと考えている。最も集中する箇所は S D 0 7 から北西側で、大半が柱穴と想定される。

A C 13の柱穴内から洪武通宝が1点（4-17）出土した。

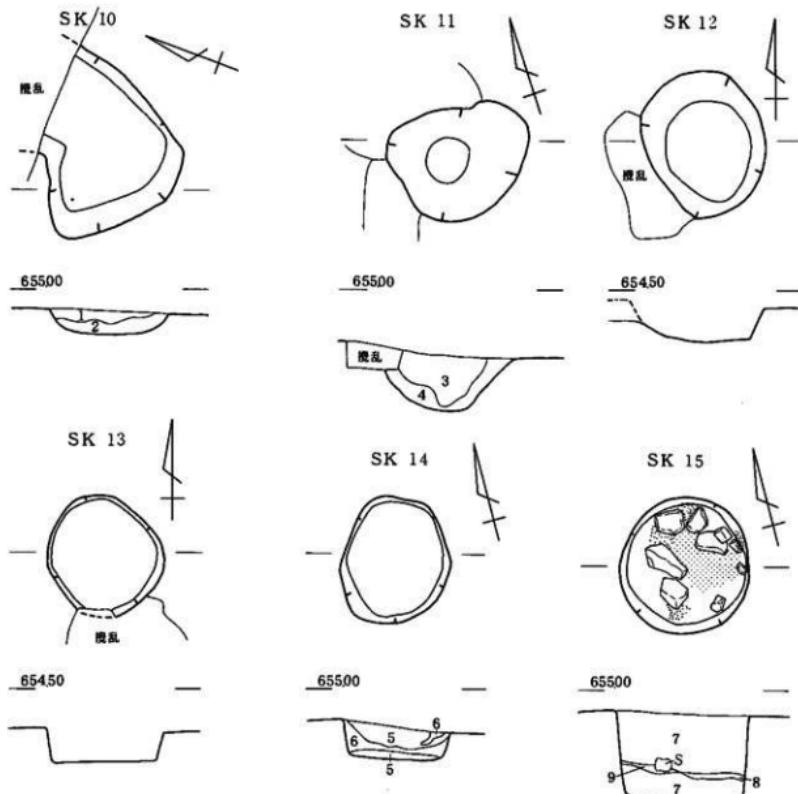
(6) 遺構外出土遺物

遺構に直接結びつかない遺物には縄文土器・石器・土師器・中・近世陶磁器・鉄器がある。中世陶磁器は遺構が多い北西部から比較的多く出土しており、遺構との結びつきが想定される。

縄文土器片11点・打製石斧3点・黒曜石片1点・土師器片3点・天目茶碗片1点・灰釉陶器片5点・青磁片1点・白磁片1点・常滑陶器片2点・山茶碗片2点・すり鉢片2点・おろし皿1点・内耳土器片4点・羽釜片1点・近世陶磁器片17点・鉄器1点がある。天目茶碗1点（3-1）・打製石斧3点（3-2～4）・鉄器鐵鎌（5-4）を図示し、縄文時代前期末深鉢片3点（2-21～23）を拓影で示した。この縄文土器は試掘調査のトレンチ内から出土していて、本調査時に遺構の確認につとめた。明確な遺構は把握できなかったが、土坑が存在した可能性が高い。

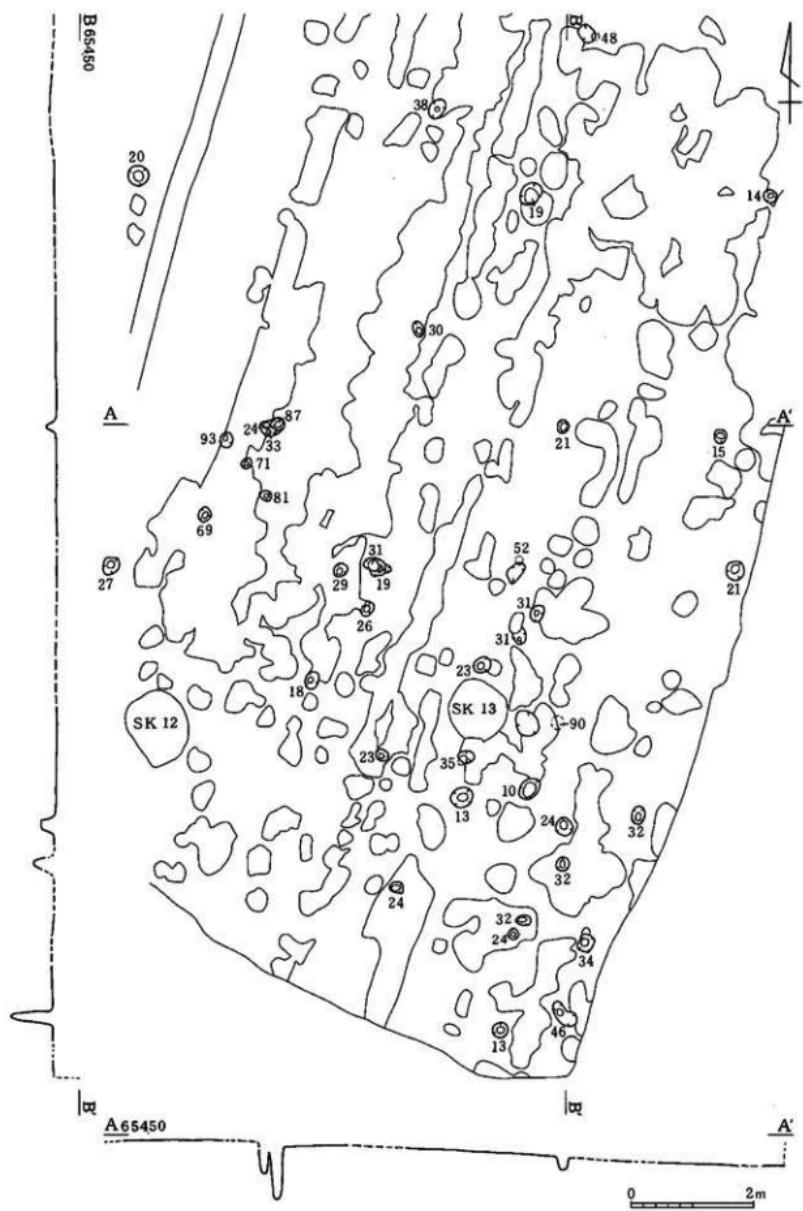


挿図22 SK 02~09

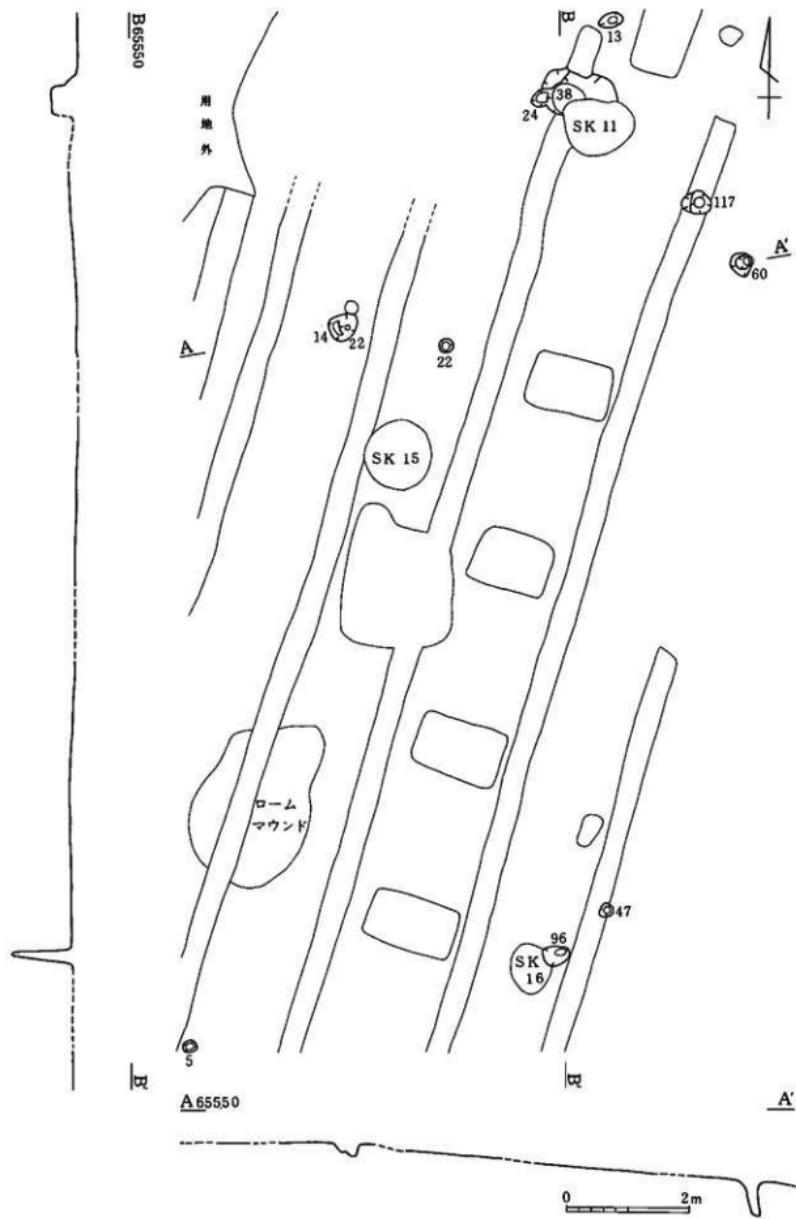


1. 暗褐色 (10YR 3/4 Sic)
2. 暗褐色 (10YR 4/4 Sic)
3. 黒褐色 (10YR 2/2 Sic)
4. 黒褐色 (10YR 2/2 Sic) にぼい黄褐色 (10YR 5/4 CL) が混じる
5. 黒褐色 (10YR 2/2 Sil)
6. 黒褐色 (10YR 2/2 Sil) にぼい黄褐色 (10YR 5/4 L) が混じる
7. 黒色 (10YR 2/1 Sil)
8. 黒色 (10YR 2/1 Sil) に炭が混じる
9. 黒色 (10YR 2/1 Sil) にぼい黄褐色 (10YR 5/4 L) が混じる

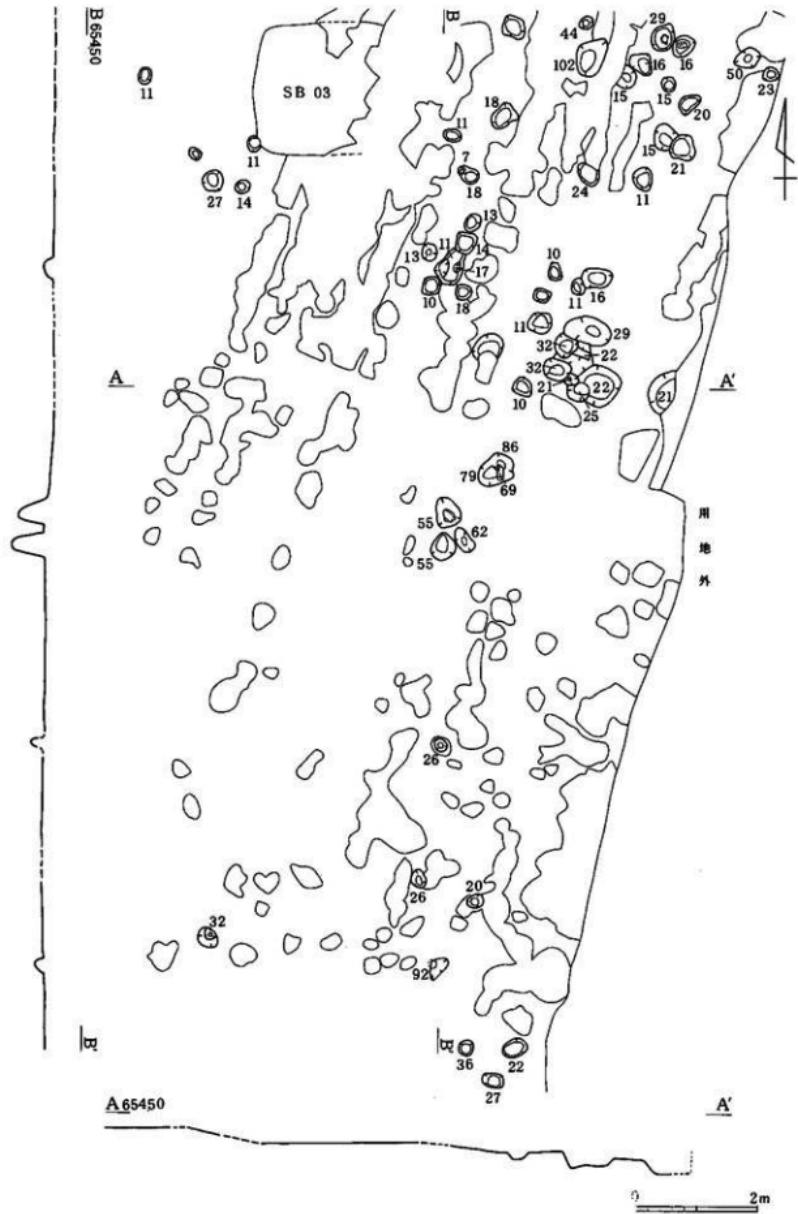
挿図23 SK 10~16



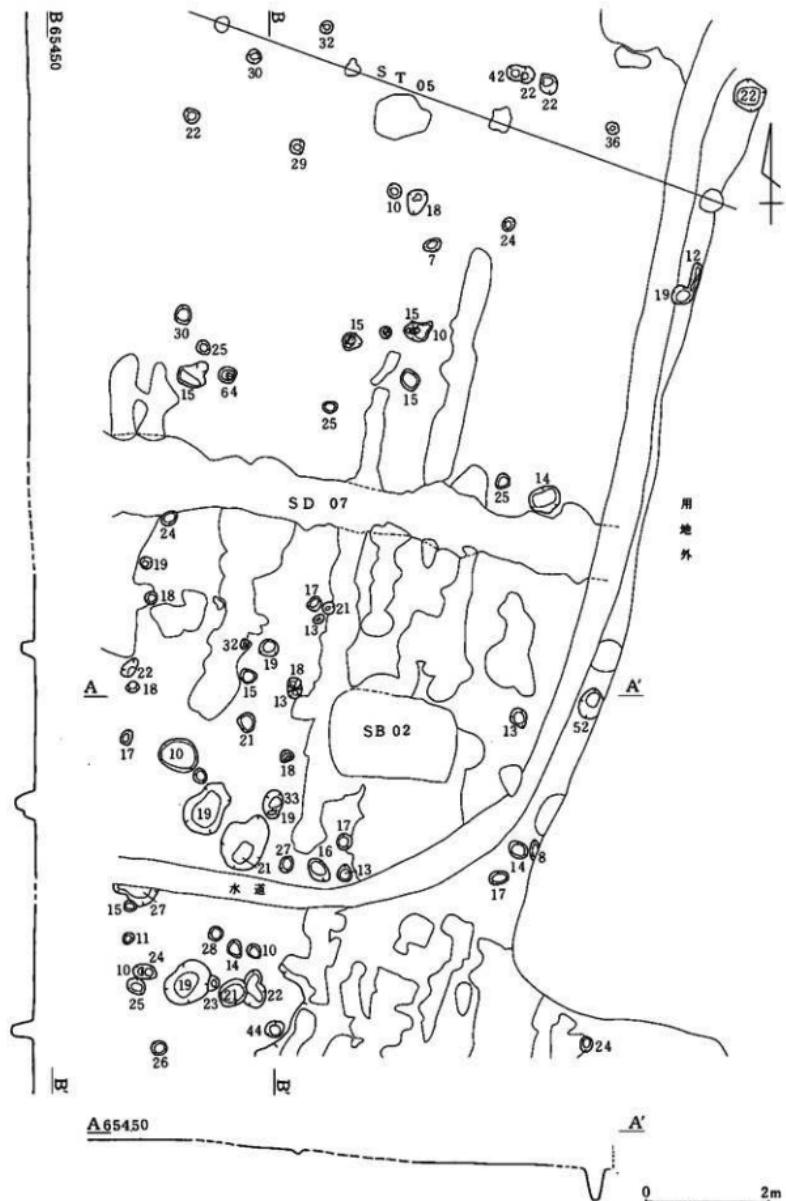
挿図24 第II地区柱穴・穴(1)



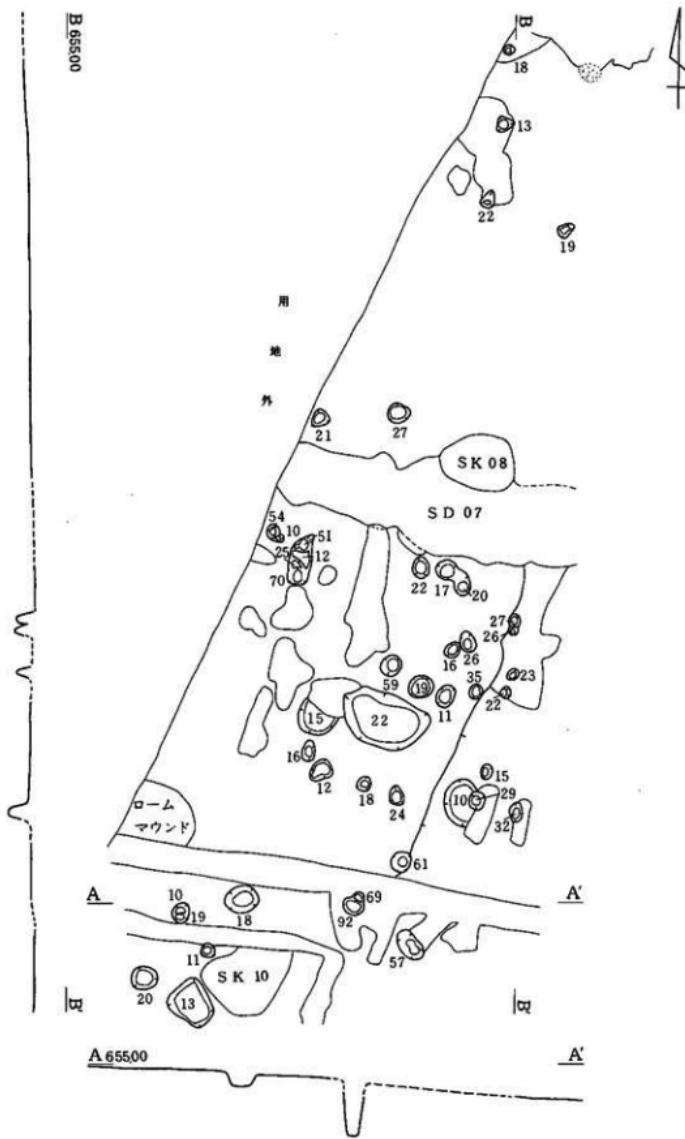
挿図25 第II地区柱穴・穴(2)



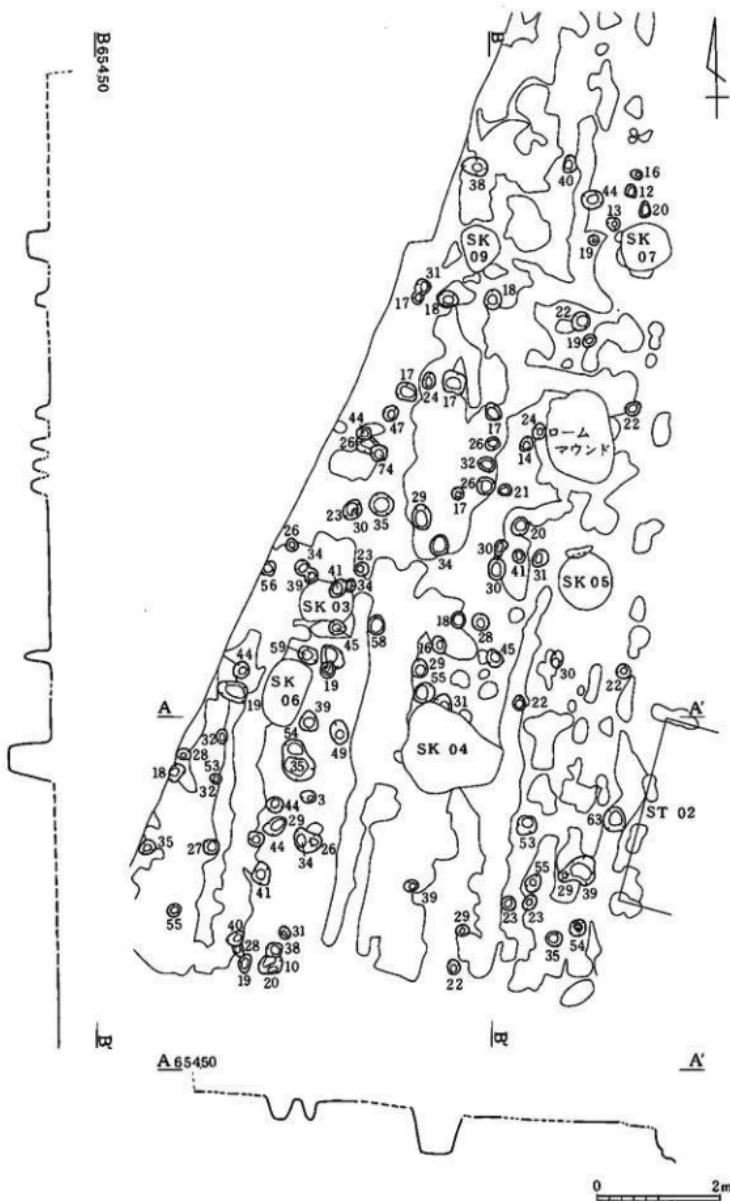
挿図26 第II地区柱穴・穴(3)



插図27 第II地区柱穴・穴(4)



挿図28 第II地区柱穴・穴(5)



擇図29 第II地区柱穴・穴(6)

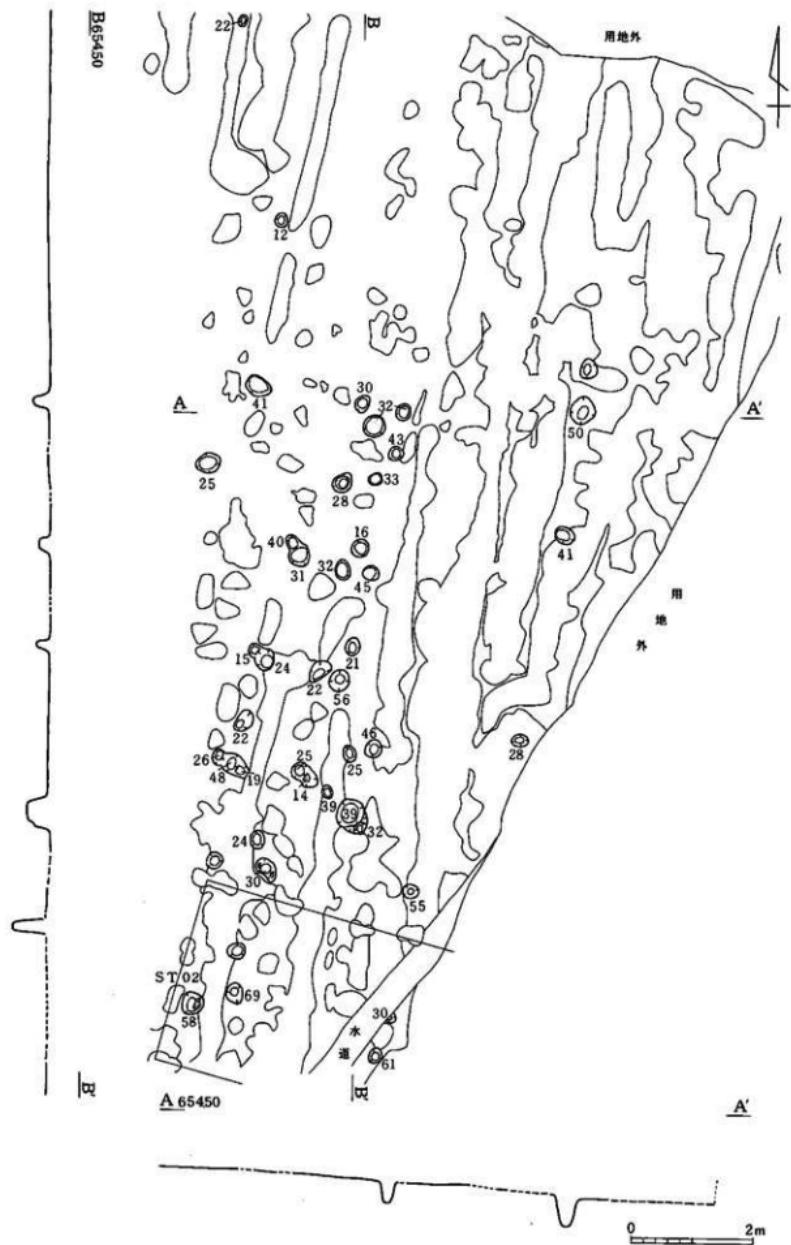


插图30 第II地区柱穴・穴(7)



挿図31 第III地区造構全体図

3) 第Ⅲ地区

(1) 基本層序

S K 2 9 の東の北東に面する壁面を挿図32で示した。

1層：褐色土 (10Y R 4/1 S L)

2層：黒褐色土 (10Y R 3/2 L)

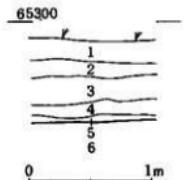
3層：黒色土 (10Y R 2/1 L)

4層：黒褐色土 (10Y R 2/3 L)

5層：暗褐色土 (10Y R 3/3 L)

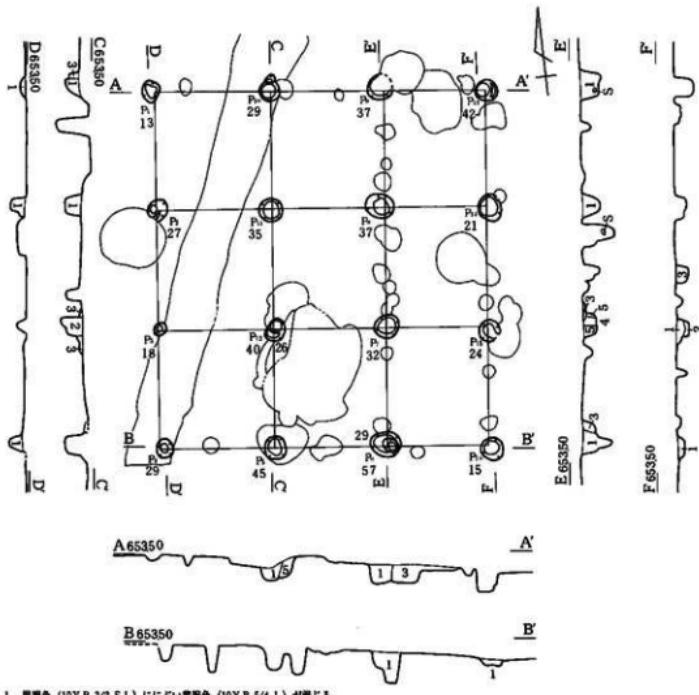
6層：にぶい黄褐色土 (10Y R 5/4 L)

調査前は2枚の水田として利用されていて、造成を受けた箇所が大半を占めるが、北東側の壁面は比較的の残存状態は良好であった。



1. 褐色 (10Y R 4/1 S L) …水田耕土
2. 黒褐 (10Y R 3/2 L)
3. 黒 (10Y R 2/1 L)
4. 黒褐 (10Y R 2/3 L)
5. 暗褐 (10Y R 3/3 L)
6. にぶい黄褐 (10Y R 5/4 L) …基盤

挿図32 第Ⅲ地区基本層序



1. 黒褐色 (10Y R 3/2 S L) ににぶい黄褐色 (10Y R 5/4 L) が混じる
2. 黒褐色 (10Y R 3/2 S L)
3. 黒褐色 (10Y R 3/2 S L) ににぶい黄褐色 (10Y R 5/4 L) が混じる
4. 黒褐色 (10Y R 3/2 S L) ににぶい黄褐色 (10Y R 5/4 L) が混じる
5. にぶい黄褐色 (10Y R 5/4 L) に黒褐色 (10Y R 3/2 S L) が混じる

挿図33 ST 0 3

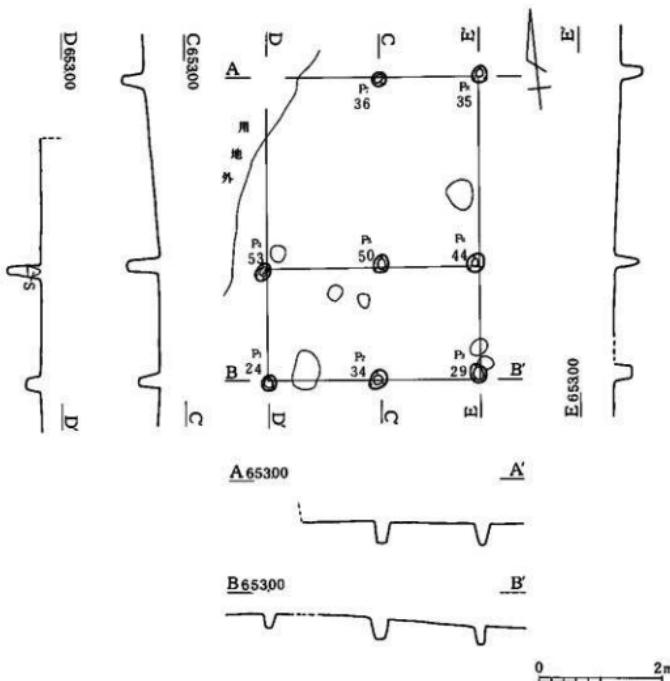
(2) 挖立柱建物址

① S T 0 3 (挿図33、図版19)

遺構 調査区南西部 A N 19を中心にして検出し、全体を調査した。中世の S K 17・20・22・23・28・35と重複する。3×3間の掘立柱建物址で、桁行6.4m・梁行6.1mを測る。柱間は桁行が2.1m、梁行が2.1・1.9mを測り、桁行方向はN 9° Eを示す。柱掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、直径56～24cmを測る。P 12で土層により柱痕が確認できた。

遺物 P 3から同一個体の常滑甕片2点、P 10から釘1点、P 12から青磁片1点が出土した。

出土遺物から中世に位置づけられる。



挿図34 S T 0 4

② S T O 4 (挿図34、第5図、図版20)

造構 調査区北西部B E25を中心にして検出し、北西隅の柱穴のみ用地外で調査できなかった。2×1間の掘立柱建物址で、桁行3.4m・梁行3.0mを測る。南側に柱間1.8mの庇が付属する。柱間は桁行が1.8m・1.6m、梁行が3.0mを測り、桁行方向はN84°Wを示す。柱掘り方は円形もしくは梢円形を呈し、直径28~24cmを測る。

遺物 P 5から毛抜き状鉄製品1点(5-5)、P 6から破損が著しく判読不明の古銭1点が出土した。

出土遺物から中世に位置づけられる。

(3) その他の造構

① 土坑

第Ⅲ地区に土坑が15基あり、個々の説明は省略して一覧表で示した。

第2表 第Ⅲ地区土坑一覧表

番号	検出位置	規模(長/短/深cm)	形態	覆土	断面形	出土遺物	時代	備考
1 7	A L18	86×66×19	不整梢円形	暗褐色	皿状	繩文土器片1・中世陶器1・砥石1	中世	
1 8	A O19	88×58×14	丸みを帯びた長方形	暗褐色	逆台形		中世	
1 9	A N19	98×92×17	円形	暗褐色	皿状		中世	
2 0	A O20	110×92×10	丸みを帯びた長方形	暗褐色	皿状		中世	
2 1	A O P-19-20	80×76×35	円形	暗褐色	逆台形	鉄器1	中世	
2 2	A O21	146×116×20	梢円形	黒褐色	皿状	尖頭器1・鉄器1・鉄滓1	中世	
2 3	A M20	72×54×18	梢円形	—	逆台形		中世	
2 4	A O23	80×56×7	梢円形	暗褐色	皿状		中世	
2 5	A Q20	72×62×29	梢円形	暗褐色	逆台形		中世	
2 6	A Q23-24	76×62×7	梢円形	黒褐色	皿状		中世	
2 7	A N18-19	112×104×15	不整方形	暗褐色	皿状		中世	
2 8	A M18-19	194×132×13	不整長方形	暗褐色	皿状	常滑片3・すり鉢1	中世	
2 9	A O-P27	180×124×14	不整長方形	黒褐色	皿状		中世	
3 4	B G28-29	88×80×40	円形	黒褐色	逆台形		中世	
3 5	A N17-18	122×106×20	梢円形	暗褐色	逆台形			

分布状況はほぼ全域に認められるが、その中でも柱穴が集中する箇所と重なっており、居住域内で一定の役割を果たしていたと考えられる。平面形や断面形は様々であり、用途も一様でないことが考えられる。

時期はほとんどが中世と想定されるが、時期決定できる遺物の出土に欠け、詳細な位置づけは不可能である。

S K 22から御子柴型の尖頭器（3-8）が出土した。全体形は明らかでないが、1/3程が残ったと考えられる。遺構の状況から中世の土坑であるので混入遺物であるが、当方ではほとんど類例がないので、貴重な資料である。なお、出土土坑周辺にトレンチを設定してローム面の掘り下げを実施したが、他には何も出土しなかった。

② 柱穴・穴

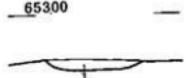
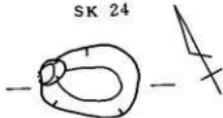
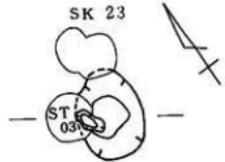
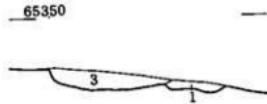
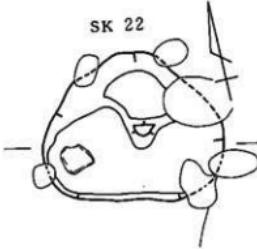
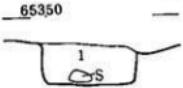
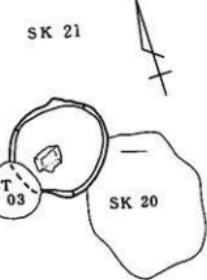
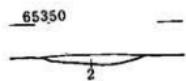
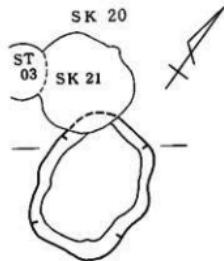
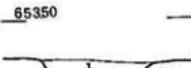
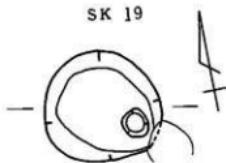
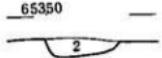
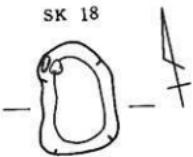
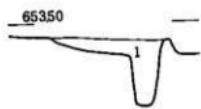
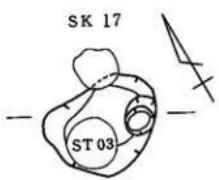
柱穴・穴は第Ⅲ地区のほぼ全体に認められ、特に南部に多い傾向を指摘できる。調査区の一部が水田の造成で削平されてしまっているが、ほぼ把握できたと考えている。重複が著しく掘立柱建物址と把握できたのは前述したS T 03・04の2棟であるが、同様に掘立柱建物址の柱穴であると考えられる。何時期にもわたって建て替えられた結果とも考えられ、遺構の単位の把握については今後に課題を残す結果となつた。

遺物はほとんど出土しなかつたが、すり鉢1点（3-9）と打製石斧1点（3-10）が出土しており、全体の状況から見て中世に位置づく可能性が高い。

(4) 遺構外出土遺物

遺構に直接結びつかない遺物には縄文土器・石器、土師器、中・近世陶磁器がある。中・近世陶磁器が多く、掘立柱建物址・柱穴との関連が想定される。

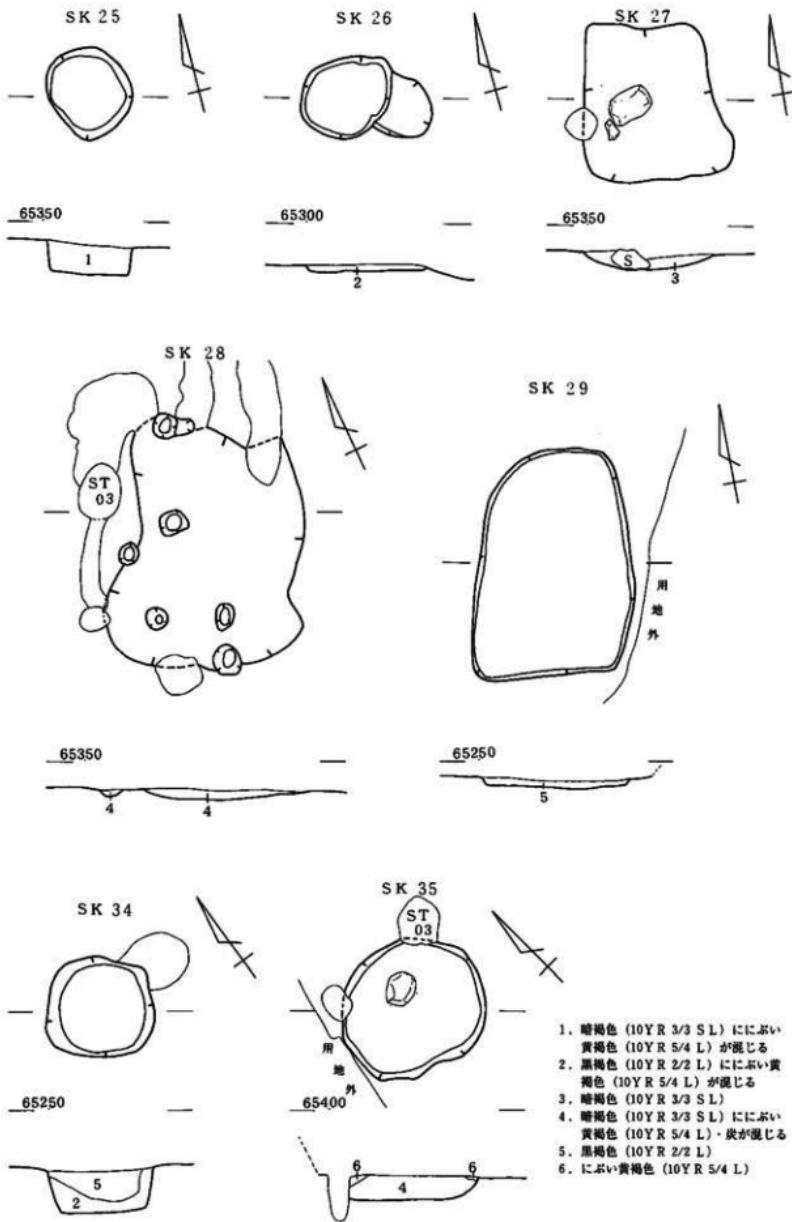
縄文土器片2点・黒曜石片1点・土師器片1点・天目茶碗片2点・灰釉陶器片3点・常滑陶器片2点・山茶碗片1点・こね鉢片2点・すり鉢片2点・鉄軸鉢片1点・おろし皿片1点・内耳土器片2点・近世陶器片9点・染付磁器7点・近世すり鉢片3点がある。縄文時代中期土器片1点（3-11）を拓影で示し、おろし皿（3-12）を図示した。



1. 暗褐色 (10YR 3/3 S L) ににぼい黄褐色 (10YR 5/4 L) が混じる
2. 暗褐色 (10YR 3/3 S L)
3. 黒褐色 (10YR 3/2 S L) ににぼい黄褐色 (10YR 5/4 L) ・炭・焼土が混じる

0 1m

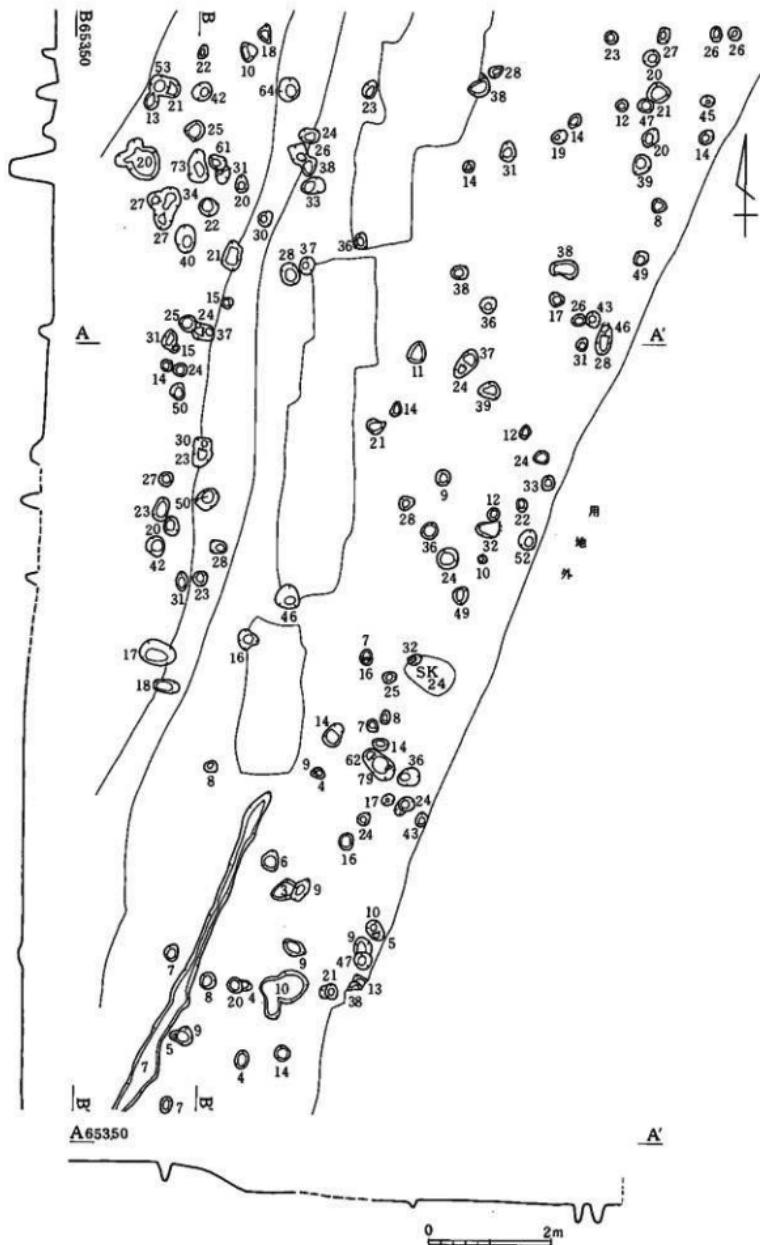
挿図35 SK 17~24



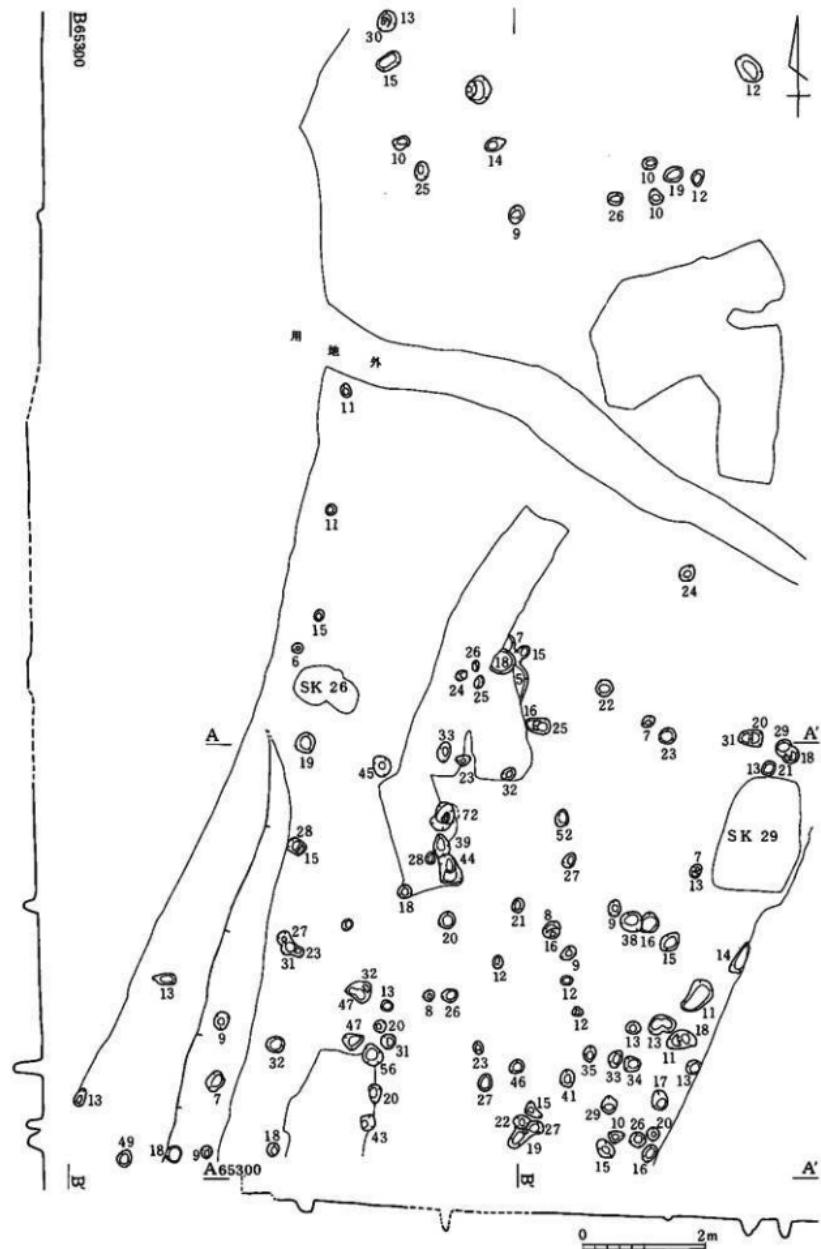
挿図36 SK 25~29・34・35



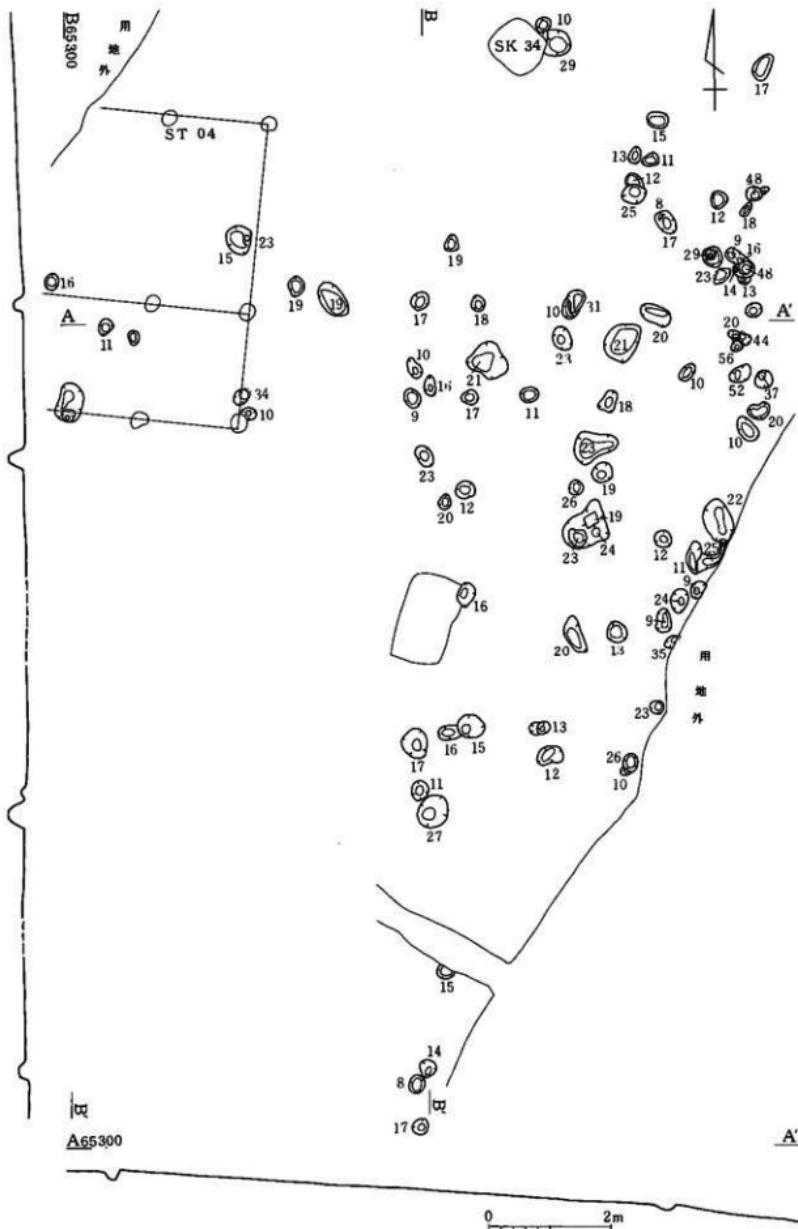
插图37 第Ⅲ地区柱穴・穴(1)



挿図38 第III地区柱穴・穴(2)



挿図39 第Ⅲ地区柱穴・穴(3)

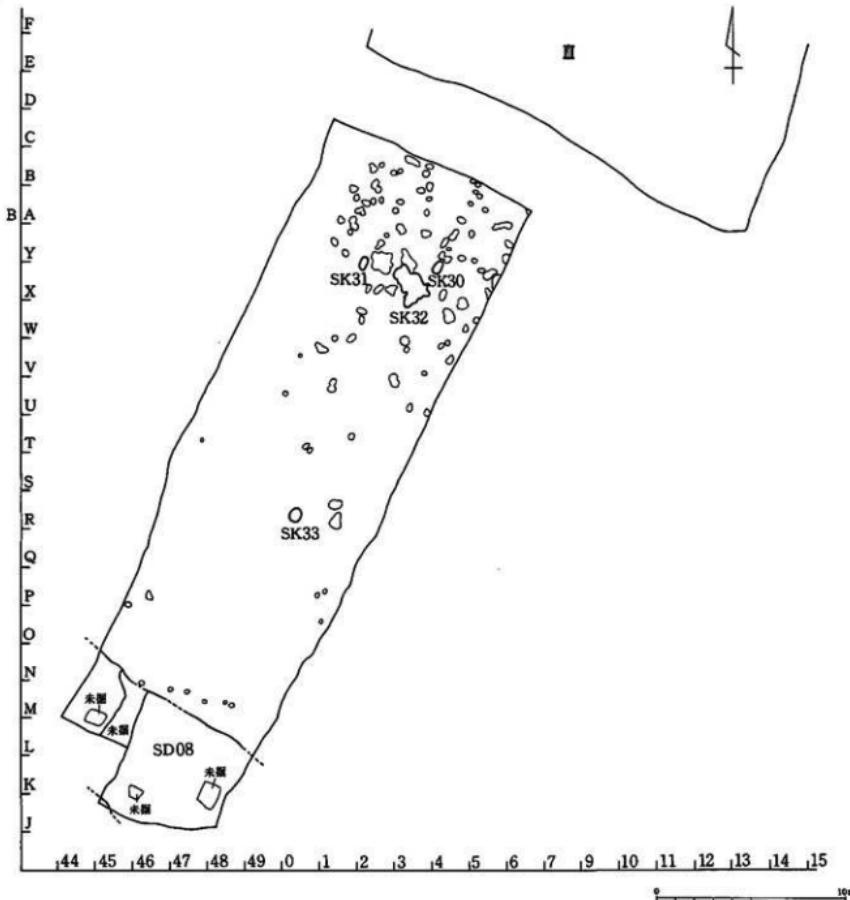


插図40 第Ⅲ地区柱穴・穴(4)

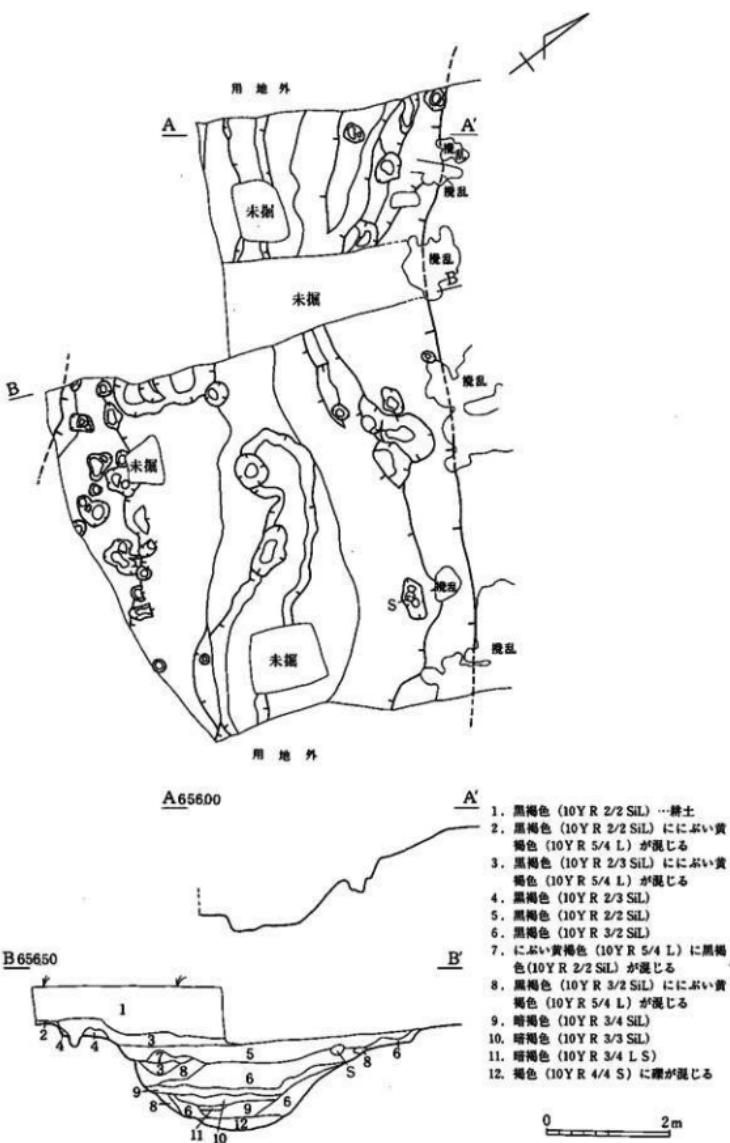
4) 第IV地区

(1) 基本層序

全体に造構検出面まで浅く、30cm前後の耕土である黒褐色（10Y R 2/2 SiL）の下は造構検出面であるにぶい黄褐色（10Y R 5/4 L）となる。全面的に耕作の擾乱を受けており、造構と擾乱の区別が土層だけでは困難であった。



挿図41 第IV地区造構全体図



拵図43 SD08

(2) 溝 増

① S D O 8 (挿図43、第3図、図版29)

遺構 調査区の南端AM44～AJ48にかけて検出した。調査延長は9.6mで、西・東側に延長する。幅6.2m・深さ184～164cmを測り、方向はN57°Wを示す。断面形は逆台形を呈し、底にわずかに水が流れた痕跡が認められる。南壁面上部から肩部には柱穴が認められる。溝に付属する施設が想定される。

遺物 繩文土器片20点・繩文時代石器4点・黒曜石片2点・土師器片2点・白磁片1点・灰釉陶器片1点がある。白磁1点(3-13)・打製石斧2点(3-14・15)・磨製石斧(3-16)を図示した。

出土遺物より中世に位置づけられる。

(3) その他の遺構

① 土 坑

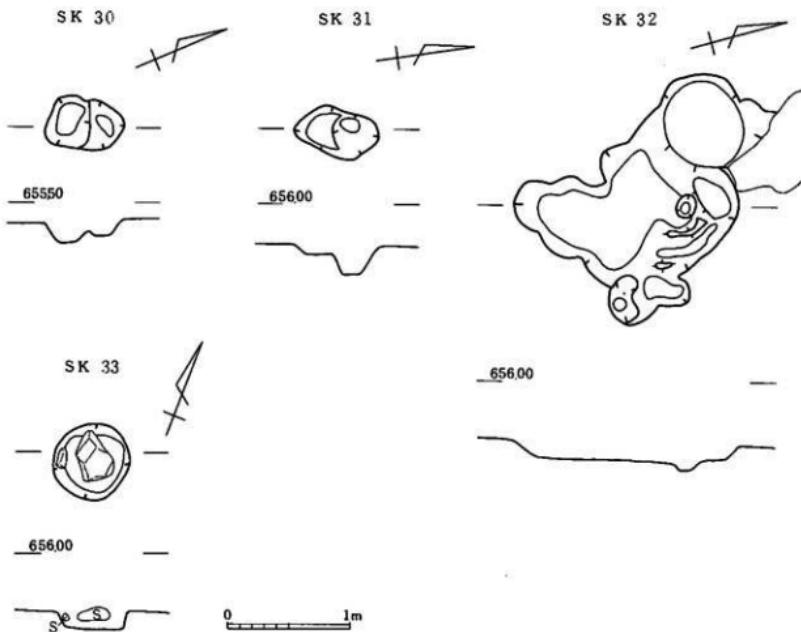
第IV地区には土坑が6基あり、個々の説明は省略して一覧表で示した。

S K 3 0～3 2は覆土が黒褐色ではほぼ同じであり、S K 3 0出土遺物からみて繩文時代後期に位置づく可能性が高い。ただし、S K 3 2は遺構の状況が不規則な箇所があり、人為的でない落ち込みとの重複が考えられる。S K 3 2は中世以降の土坑との共通性が強い。

出土遺物はS K 3 0の繩文時代後期の瘤付き土器(3-17・18)がある。

第3表 第IV地区土坑一覧表

番号	検出位置	規模(長/短/深cm)	形態	覆土	断面形	出土遺物	時代	備考
3 0	A X 3・4	64×42×20	楕円形	黒褐色	2段	瘤付土器・繩文土器無文片2	繩文時代後期	
3 1	A X 1・2	68×38×22	長楕円形	黒褐色	2段	繩文土器小片1	繩文	
3 2	A W・X 3	214×164×20	不定形	黒褐色	不定形	繩文土器小片1	繩文	
3 3	A R 0	60×60×20	円形	暗褐色	逆台形		中世以降	



挿図42 SK 30～33

② 柱穴・穴

柱穴・穴は調査区北側に集中する傾向にある。第Ⅱ地区北部から第Ⅲ地区でみられたような中世の柱穴とは覆土や遺構の様相が異なり、掘立柱建物址の柱穴ではないことも考えられる。

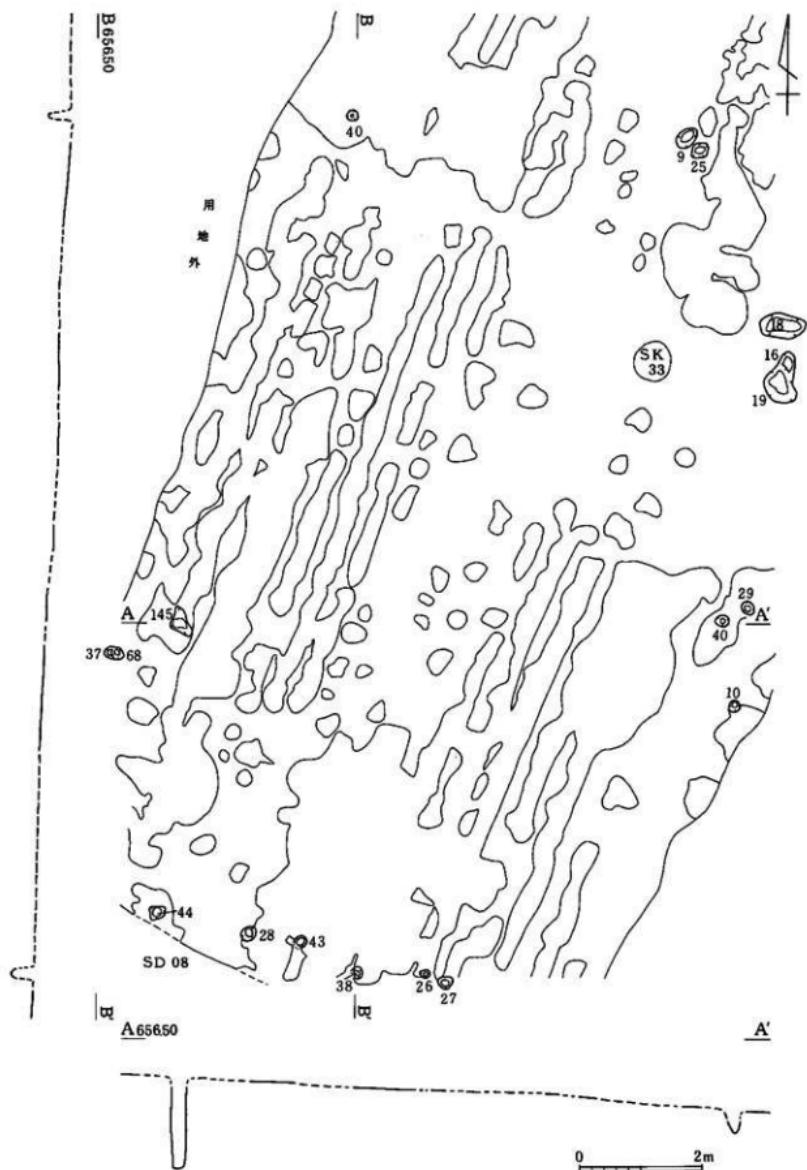
遺物は何も出土しなかった。

(4) 遺構外出土遺物

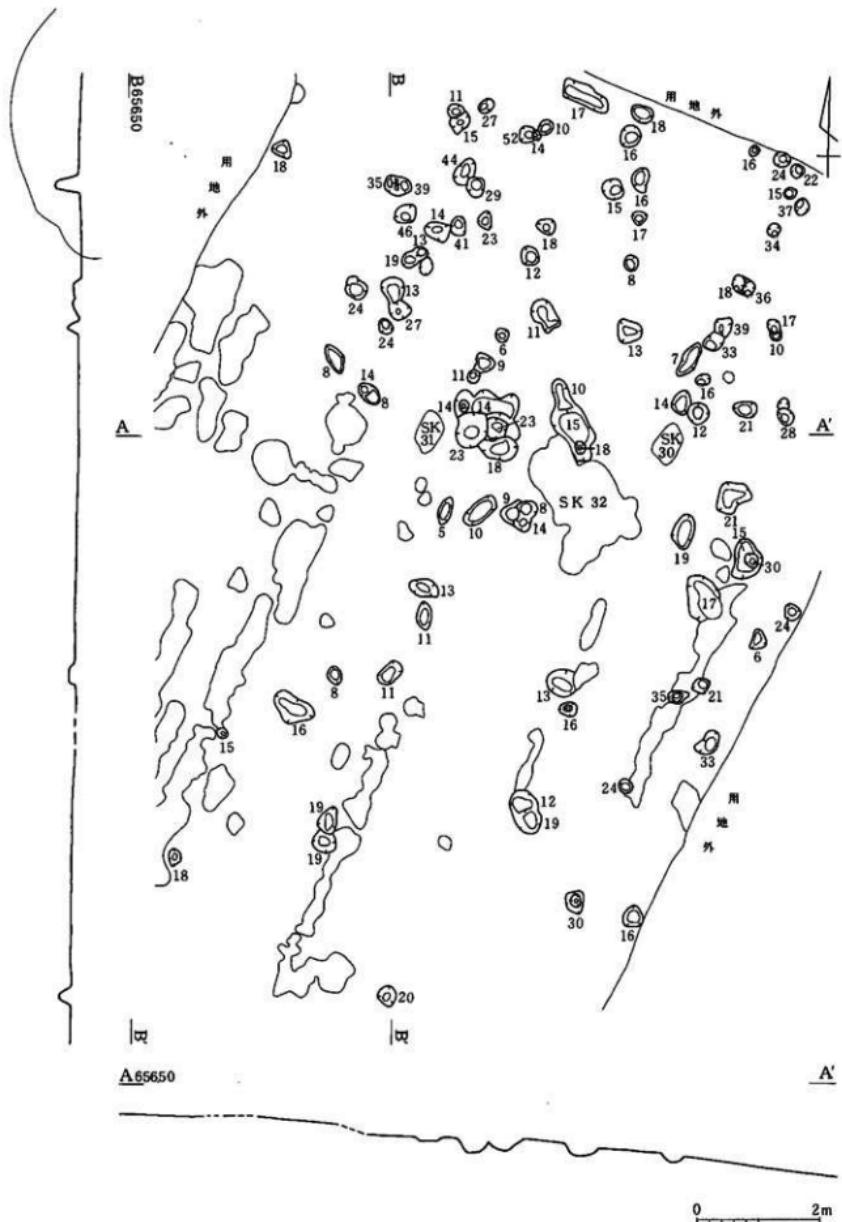
遺構に直接結びつかない遺物には少なく、縄文土器・石器、土師器がある。

縄文土器片 6 点・打製石斧 2 点・黒曜石片 3 点・土師器小皿 1 点・天目茶碗片 2 点・灰釉陶器片 1 点・近世陶磁器器片 8 点がある。

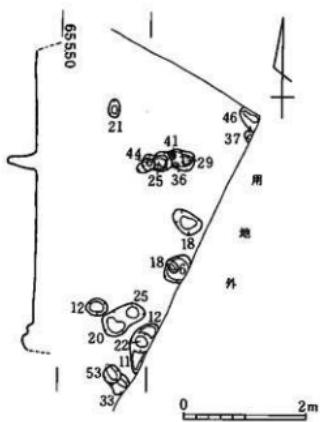
縄文土器 2 点（3-19・20）を拓影で示し、手づくね整形の土師器小皿 1 点（3-21）と分銅形の打製石斧 1 点（3-22）を図示した。



擇図44 第IV地区柱穴・穴(1)



插図45 第IV地区柱穴・穴(2)



擇図46 第IV地区柱穴・穴(3)

IV まとめ

今次調査によって検出された遺構・遺物はすでに述べたとおりである。時間等の制約により、十分な説明や検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた成果、問題点を指摘してまとめとしたい。

遺跡立地について

山本西平遺跡の範囲は木曾山脈前山から流れ出す河川によって形成された扇状地上に立地し、東に緩く傾斜する700×500mの広大な範囲を占める。路線はその中央部をほぼ地形に沿った形で南北方向に横断して計画され、発掘調査によって遺跡立地の違いが明らかとなった。

第Ⅰ地区は遺跡南側にあり、遺跡北側を占める第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区とは300m離れている。試掘調査によってその間には湿地帯が存在していることが確認されている。いわば、異なる台地上に遺跡が立地しており、それぞれに様相が異なっている。

第Ⅰ地区の様相

第Ⅰ地区では、きわめて限られた調査範囲ではあったが、縄文時代中期後葉の堅穴住居址と土坑および近世を主体とする溝址・柱穴等が確認された。縄文時代は集落の一部を調査したと考えられ、地形的にみて、その中心地域は今次調査地の西側であると推定される。それを裏付けるように、縄文土器が耕作中に出土したとの話を地権者からうかがうことができた。近世では溝址・掘立柱建物址・柱穴があり、居館的な様相を示している。その時期は、第Ⅰ地区から出土した遺物の主体を占める近世陶磁器から推定できるが、その位置づけについて十分に検討できていないので、今後の課題となる。比較的多く染め付け磁器が出土しており、江戸時代後期から幕末あたりの時期が主体になるとも考えられる。当該地西側には、江戸時代に代官屋敷があった山本氏居館遺跡がある。それとの強い関連が認められ、何らかの役割を果たしていたと考えられる。

第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区の様相

第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区は前述したように一体として把握することができる。縄文時代の土坑がわずかにあるが、主体となる時期は中世といって良い。第Ⅳ地区南端で検出したSD07は遺構の状況から見て、当該期の居住域を画する空堀と考えられる。SD07の南側では、試掘調査の結果遺構は検出されていないので、そこから北側が居館的な地域といえる。そうした中でも遺構の分布に粗密があり、第Ⅱ地区北側から第Ⅲ地区がもっとも中心地域として考えられる。柱穴が密集した状態で検出されており、何度もわたって掘立柱建物址が建て替えられた結果と考えられる。柱穴が比較的少なくなる第Ⅱ地区中央部やや北寄りには、区画用のSD04があり、ほぼ同じ方向にのびる柵列と想定されるST05もある。居住域内での役割の違いが想定され、柱穴の少ないSD04北側には、小規模な堅穴住居址が存在する。また、第Ⅲ地区北側は宮沢川による浸食で地形的に区切られており、南北方向の居住域はほぼ把握できたといえる。

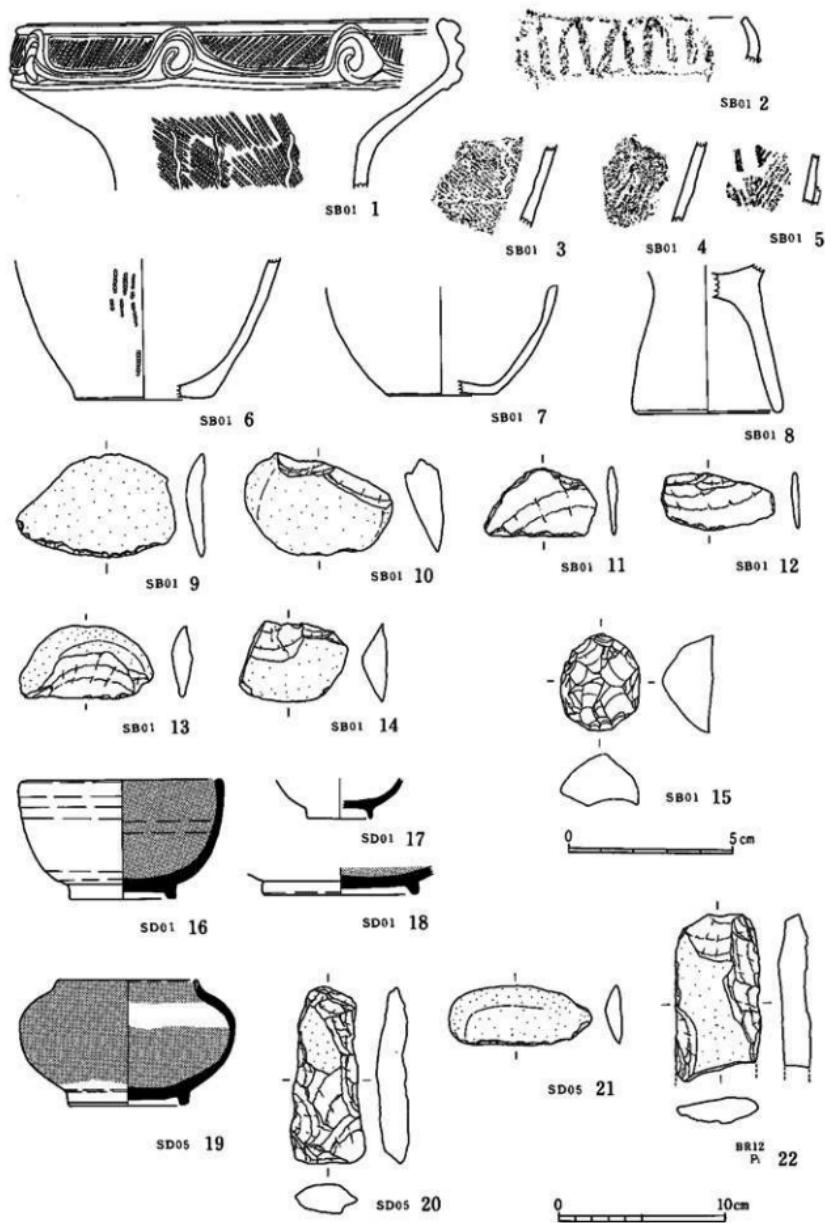
個々の遺構についてそれぞれの所属時期を推し測るには、遺物の出土がきわめて少ないために難しい。乏しい材料からみると、第Ⅳ地区のSD07に近い遺構外から出土した手づくねの土師器小皿は13世紀後半から終末に位置づくと考えられる。柱穴が多い第Ⅱ地区北側から第Ⅲ地区では、13世紀後半のおろし皿や15世紀の天目茶碗がある。他に、SK04からまとまって出土した古銭は、621年初鋸の開元通宝から1368年初鋸の洪武通宝まであるが、14世紀後半以降に埋められたことは確定である。そうした点から、鎌倉時代後半から室町時代までの比較的長い期間利用されていたことが考えられる。

縄文時代の遺構は土坑のみであるが、打製石斧や縄文土器がわずかながら出土しており、周辺地域には集落が広がっていることが想定される。地形的にみて、その候補地は今次調査地の西側と考えられる。

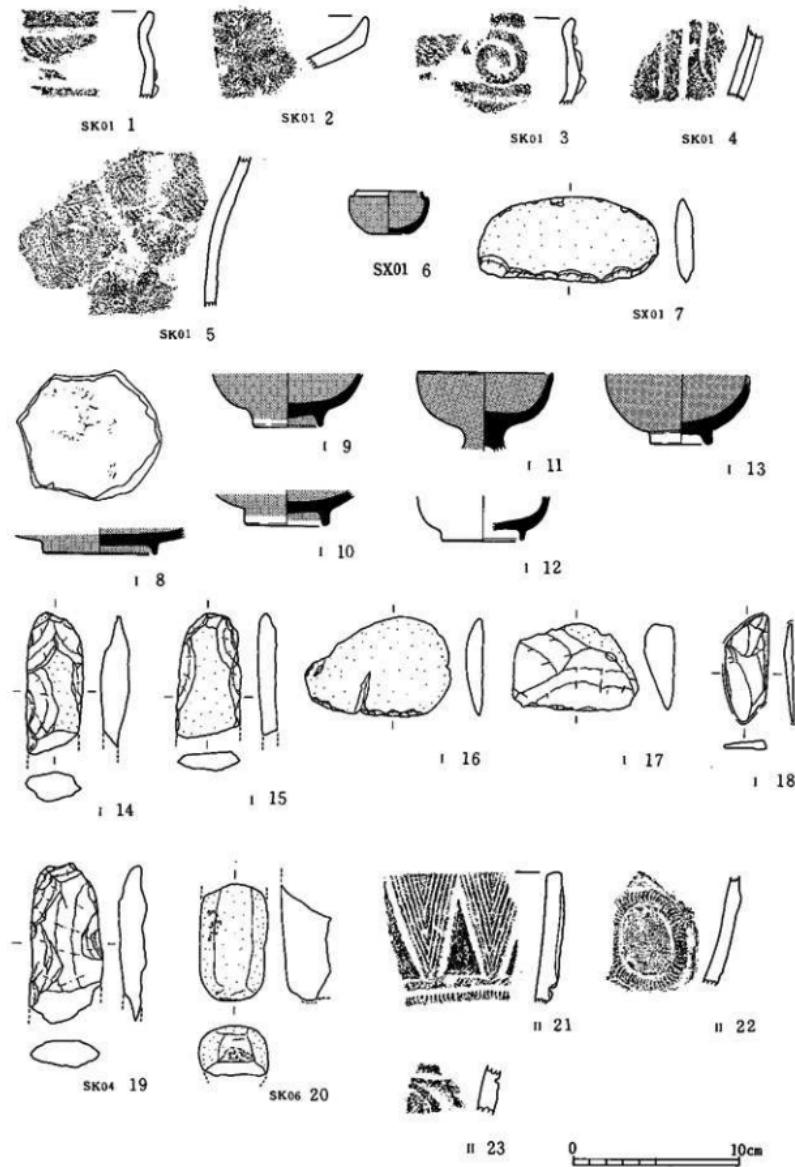
今次調査によって得られた問題点・課題に記してきたが、十分に整理できたものでなく、思いつくまま述べたにすぎない。特に、今次調査のもっとも主体的な時期である中世については、遺構単位の把握や時期決定に問題を残してしまった。さらに、文献等史学的な調査は全くすることができなかつた。すべて今後の課題である。

引用・参考文献

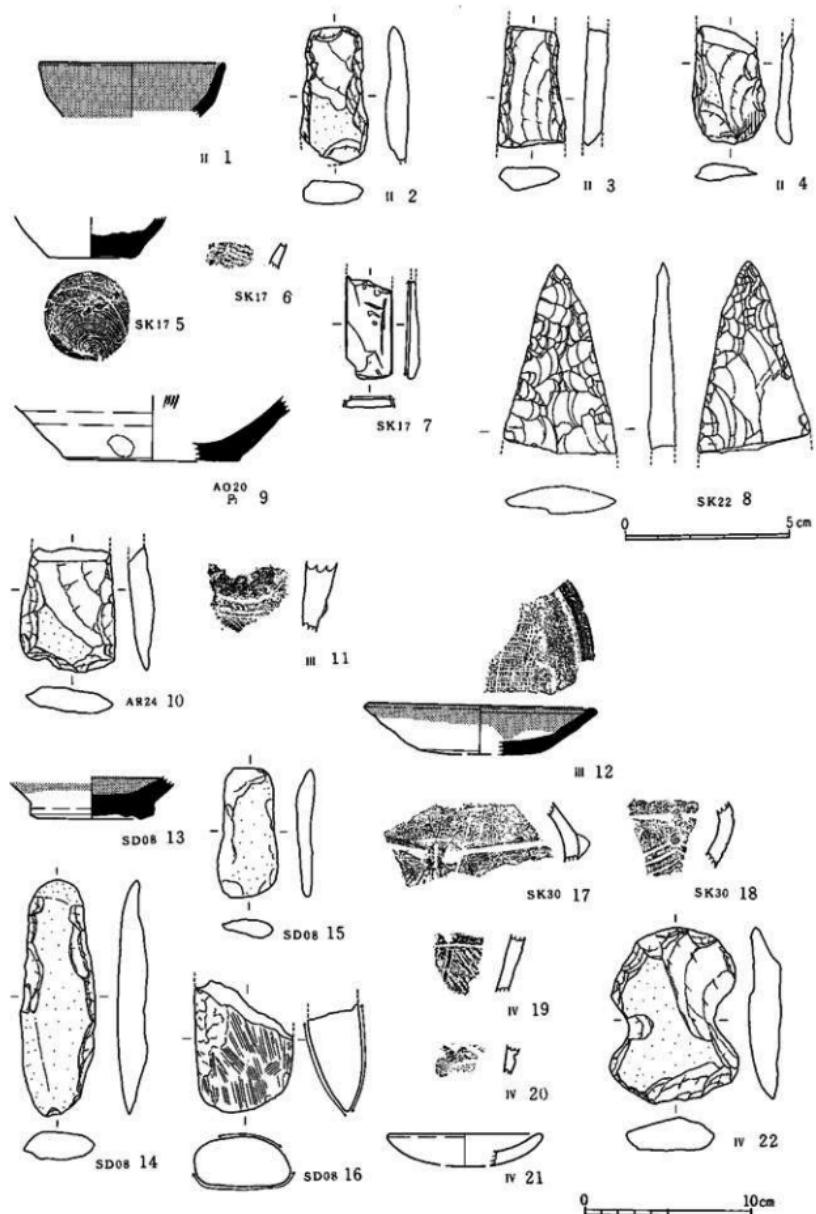
- | | | |
|----------|-------|----------------------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1981 | 「白山遺跡」 |
| 飯田市教育委員会 | 1989 | 「高野遺跡」 |
| 飯田市教育委員会 | 1996 | 「三尋石遺跡 三尋石(II)遺跡」 |
| 飯田市教育委員会 | 1997 | 「湯川遺跡」 |
| 上郷町教育委員会 | 1989 | 「垣外遺跡」 |
| 下伊那郡誌編纂会 | 1991 | 『下伊那史』第一巻 |
| 下伊那考古学会 | 1969 | 『大塚 - 長野県飯田市山本区竹佐』 |
| 長野県教育委員会 | 1973A | 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 一飯田地区その2-』 |
| 長野県教育委員会 | 1973B | 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 一飯田地区その3-』 |
| 山本村誌編纂会 | 1957 | 『山本村誌』 |



第1図 第I地区出土遺物



第2図 第I・II地区出土遺物



第3図 第II・III・IV地区出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



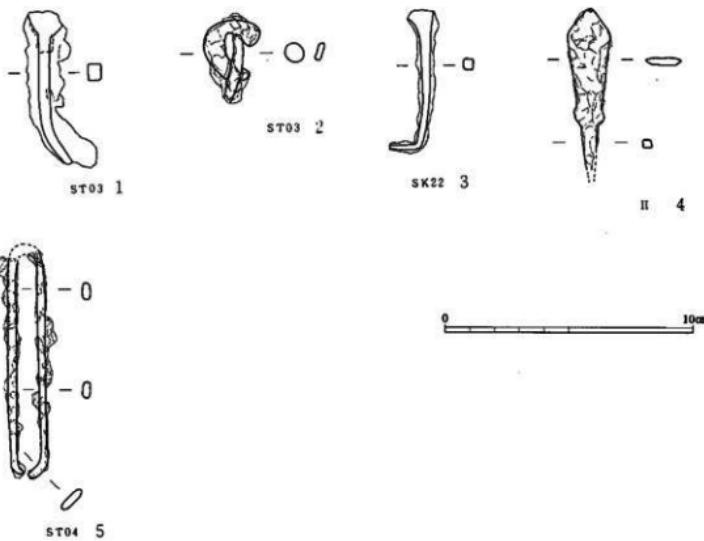
16



17



第4図 第I・II・III地区出土古錢



第5図 第II・III地区出土鉄製品



S B 0 1



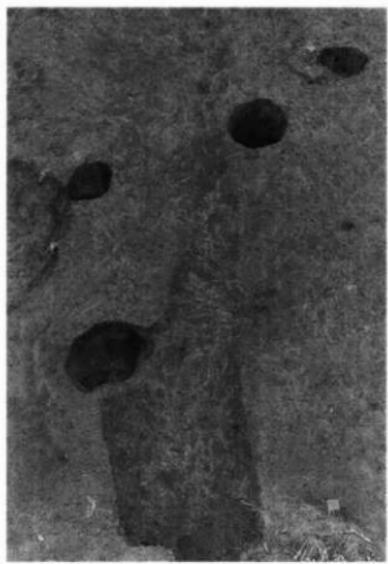
S B 0 1 炉址



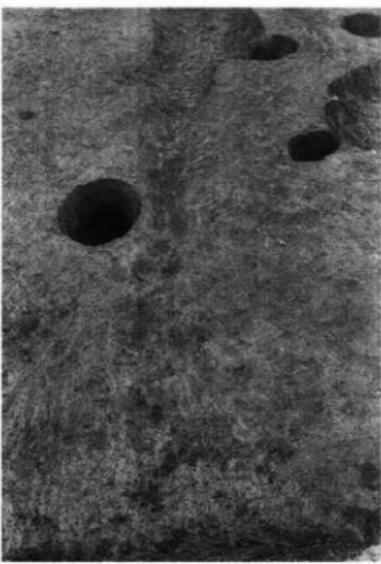
SD 01 (南東から)



SD 01 (北西から)



SD 02 (南東から)



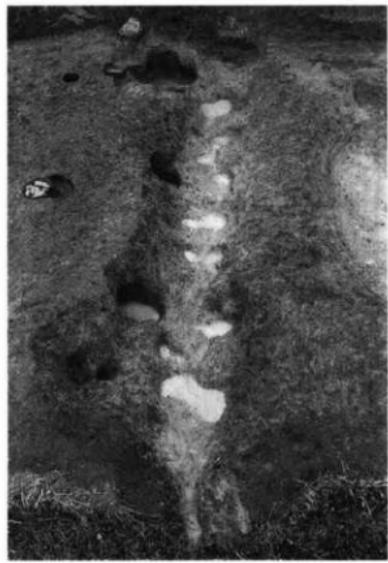
SD 02 (北西から)



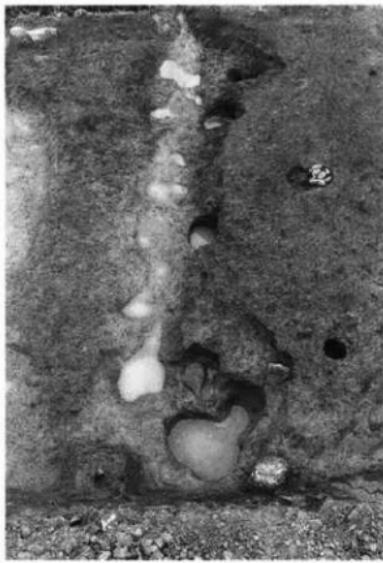
SD 3 + 4 (南東から)



SD 3 + 4 (北西から)



SD 5 (南東から)



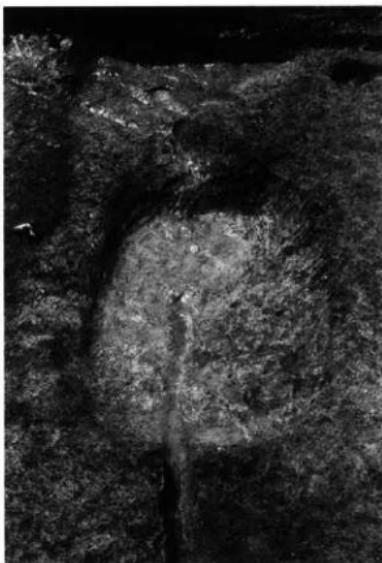
SD 5 (北西から)



S T 0 1



S K 0 1



S X 0 1



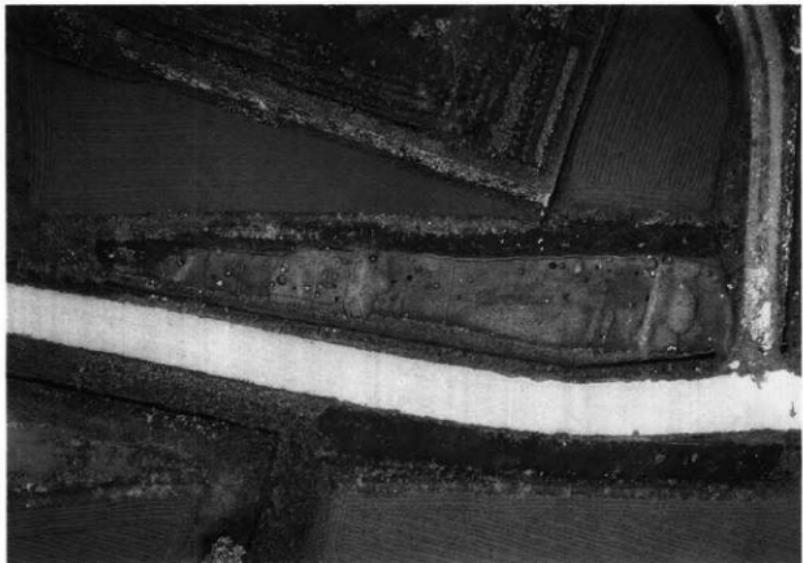
第 I 地区 南西部柱穴



第Ⅰ地区 全景（南西から）



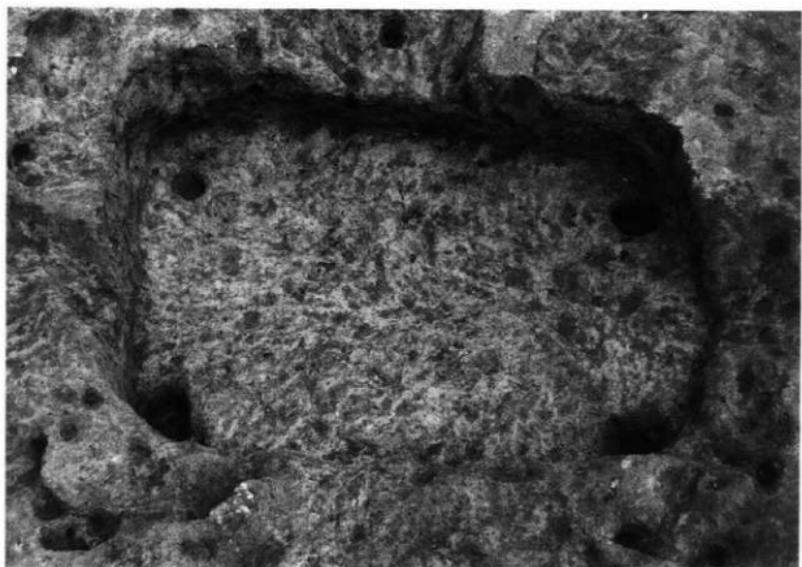
第Ⅰ地区 全景（北東から）



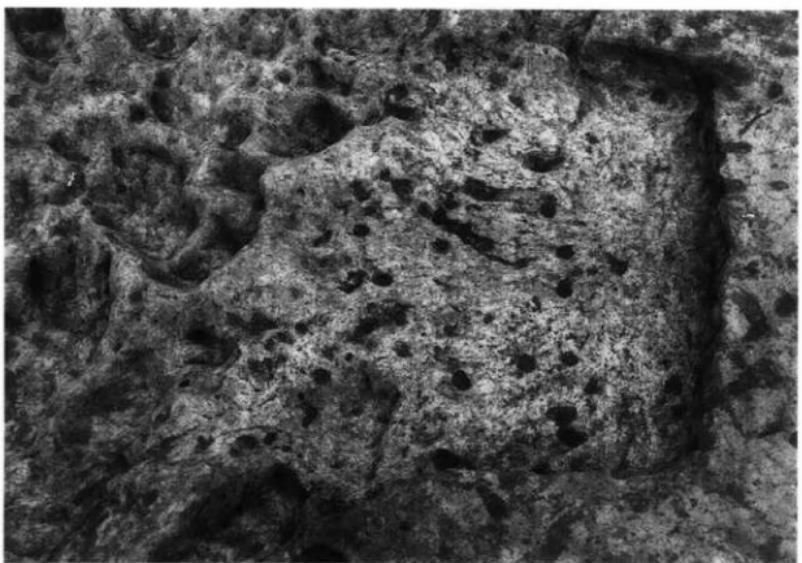
第Ⅰ地区全景（上空から）



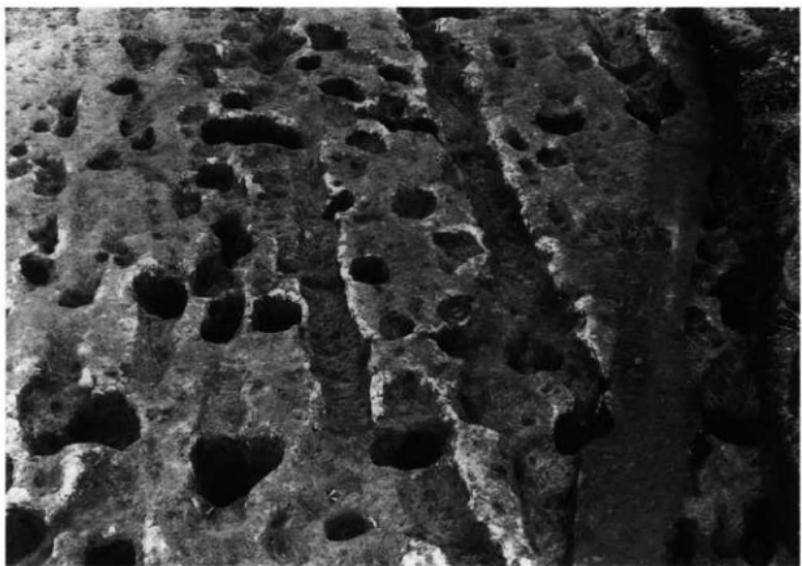
第Ⅰ地区全景（斜め上空 南東から）



SB02



SB03



S T 0 2



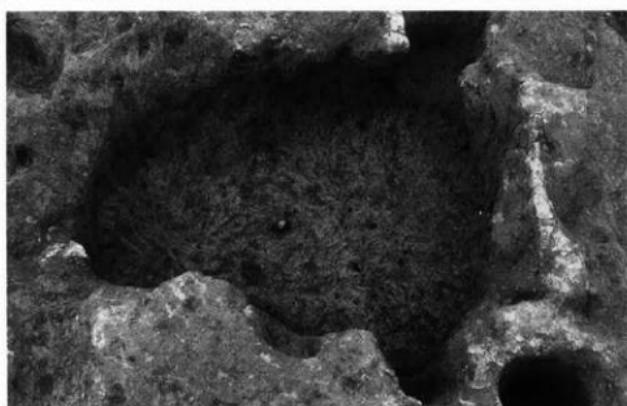
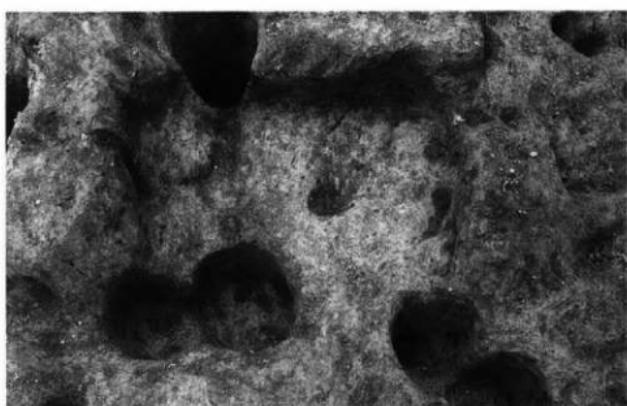
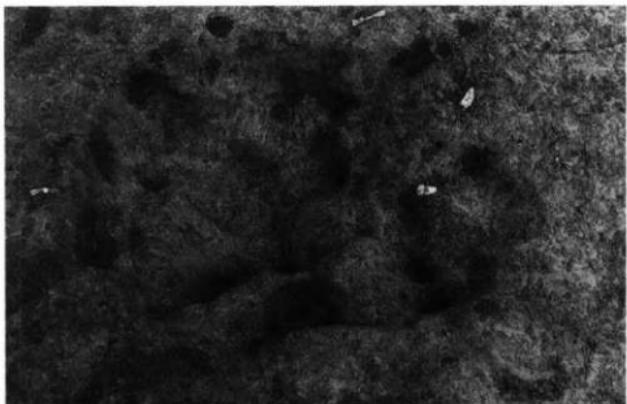
S D 0 6

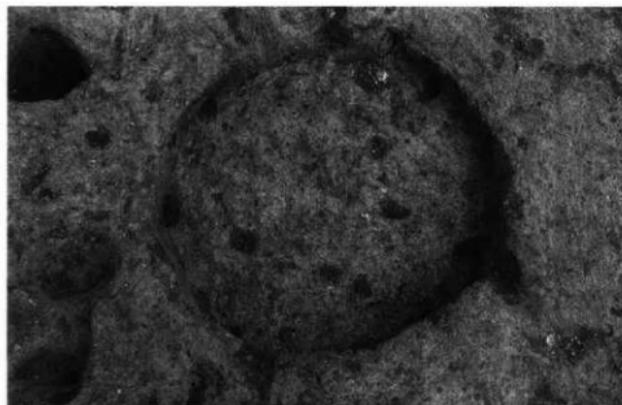


SD 07 (西から)

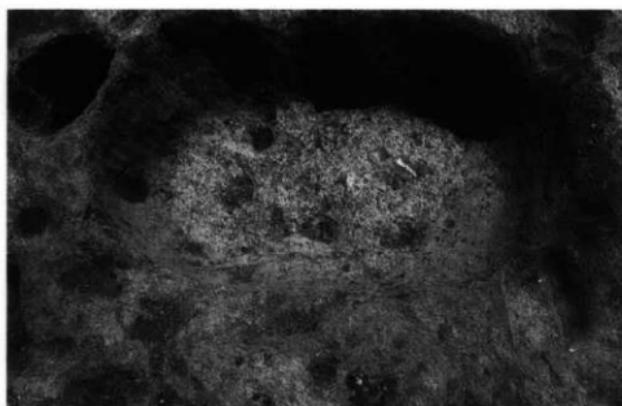


SD 07 (東から)

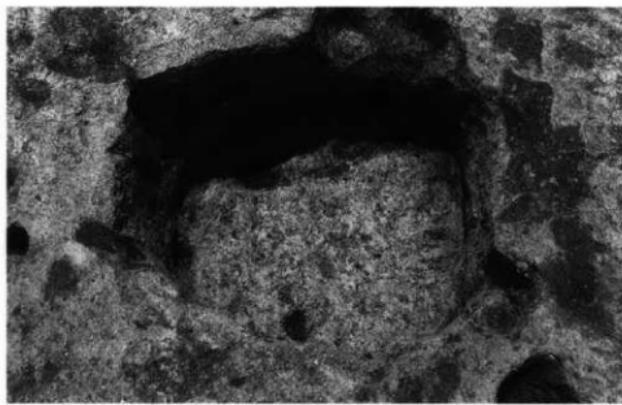




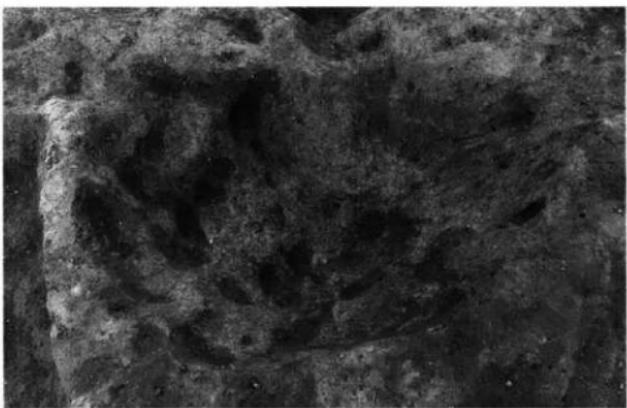
SK 05



SK 06



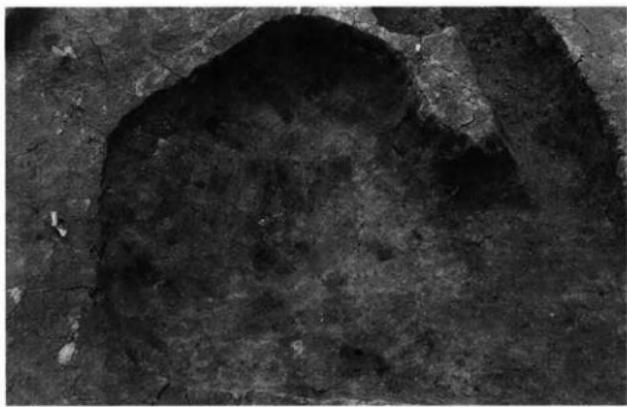
SK 07



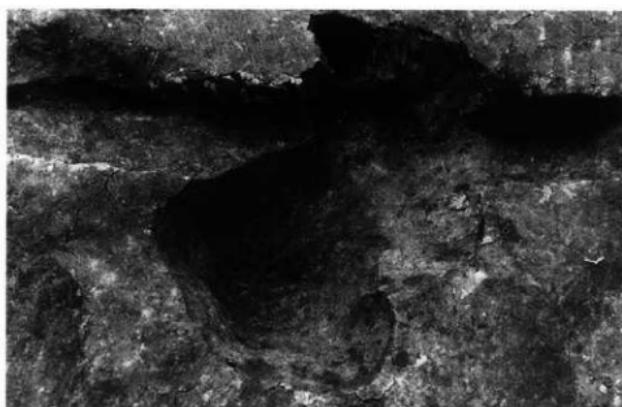
SK 08



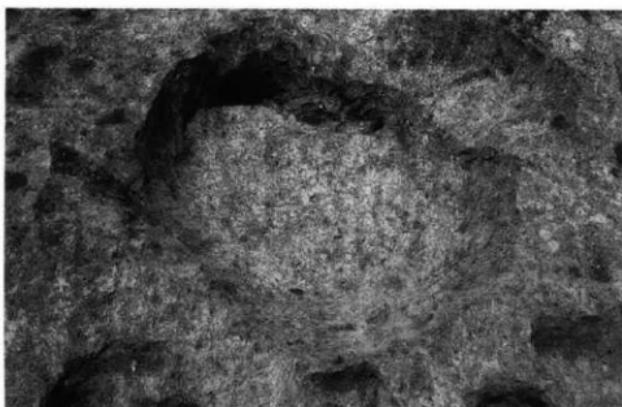
SK 09



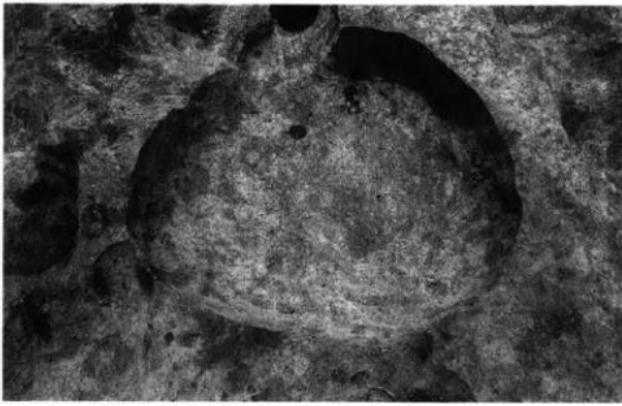
SK 10



SK 11



SK 12



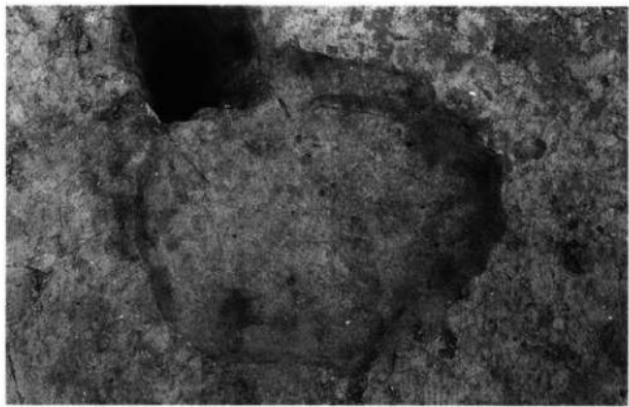
SK 13



SK 14



SK 15



SK 16



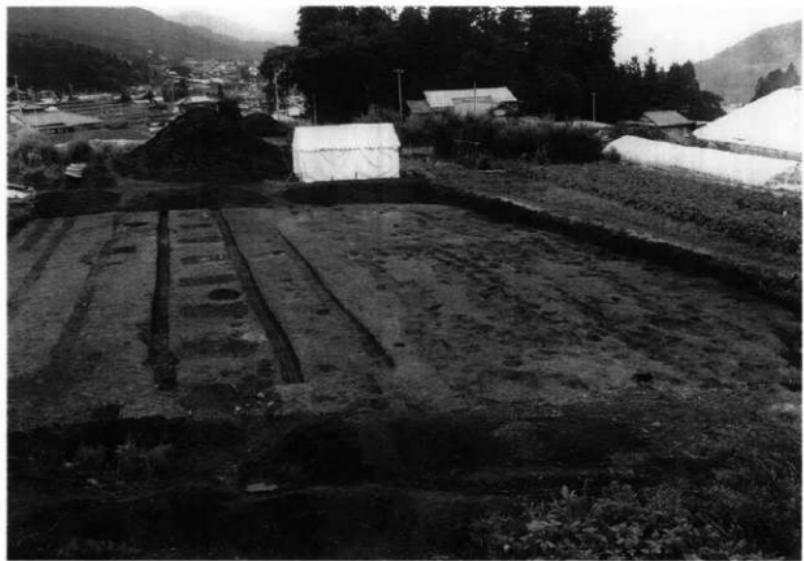
第II地区 北部全景（北から）



第II地区 北部全景（南から）



第II地区 南部全景（北から）



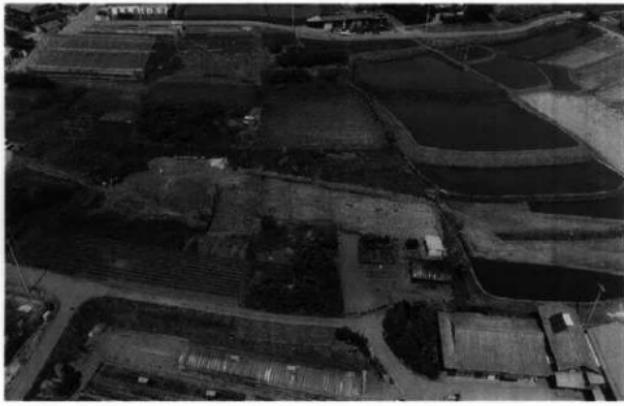
第II地区 南部全景（南から）



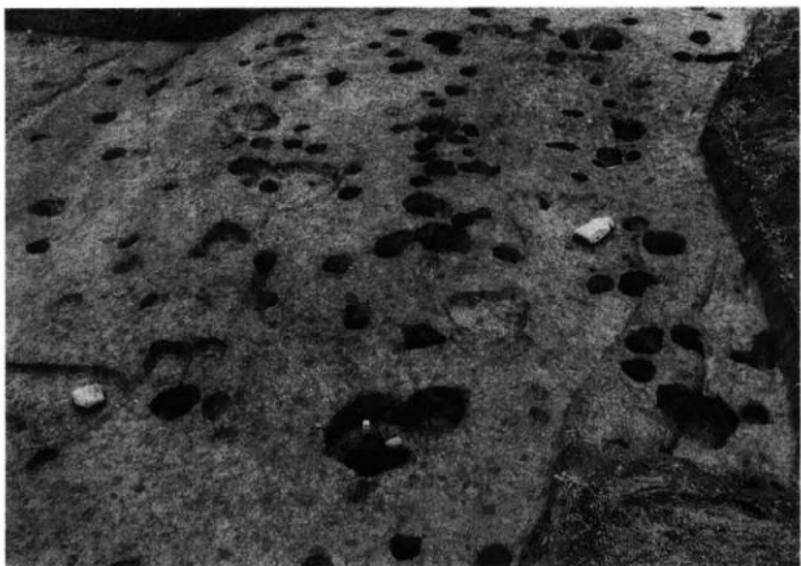
第II地区 南部全景
(上空から)



第II地区 北部全景
(上空から)



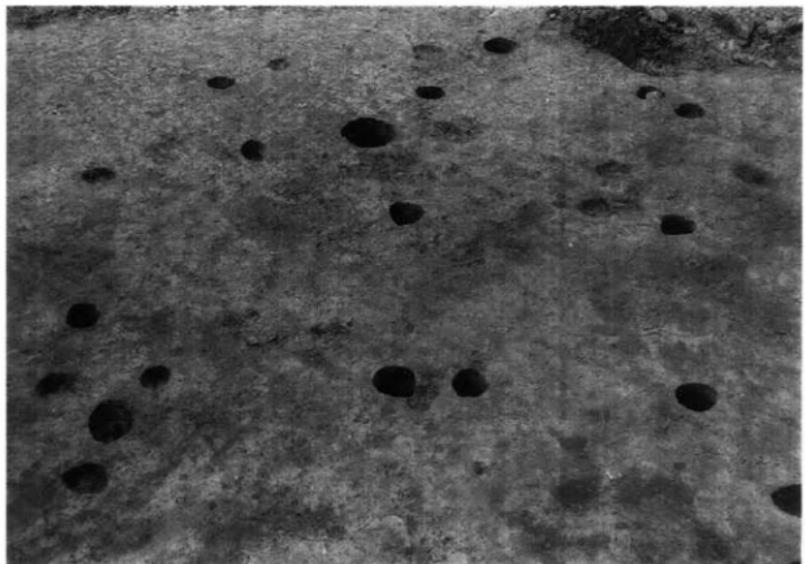
第II地区 北部全景
(斜め上空 東から)



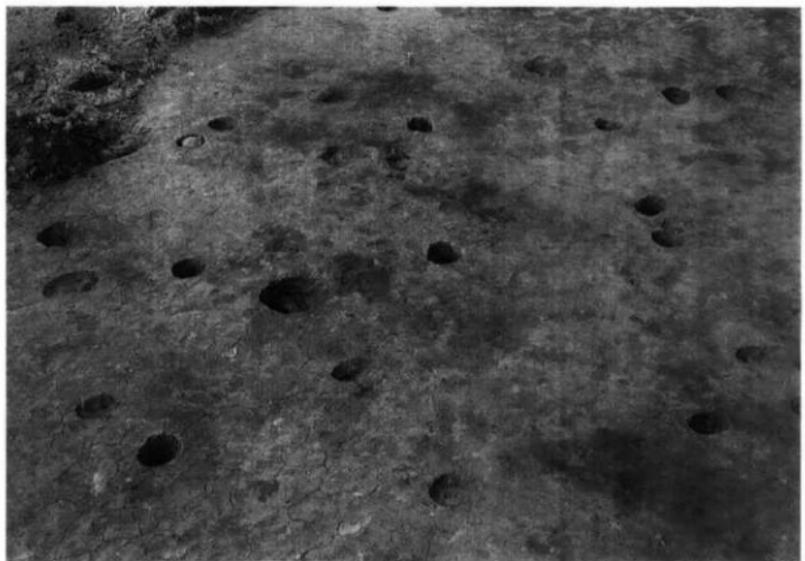
ST 03 (北から)



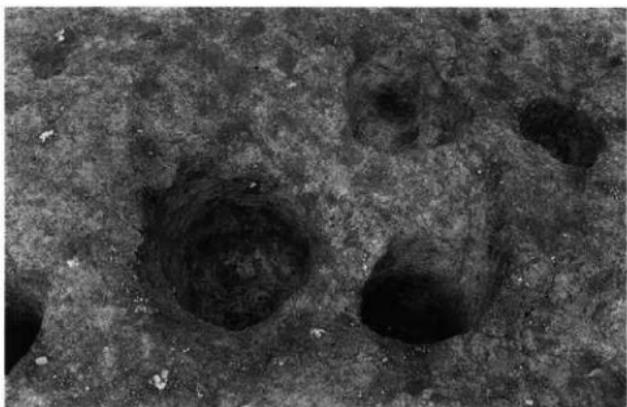
ST 03 (南から)



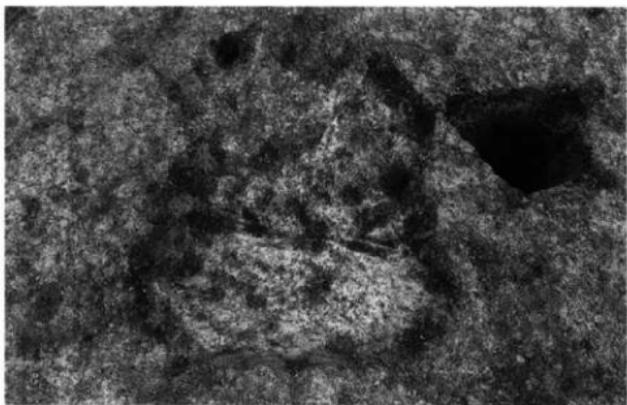
S T 0 4 (東から)



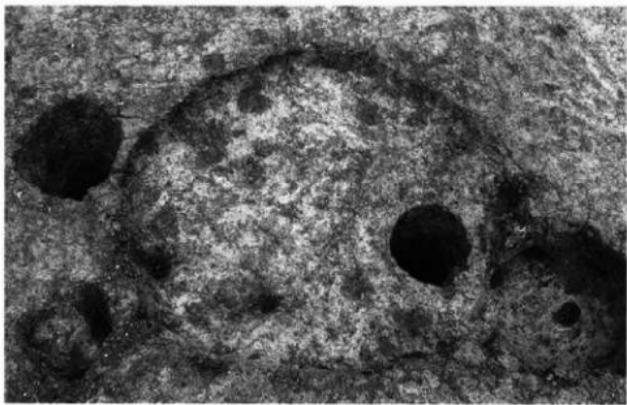
S T 0 4 (南から)



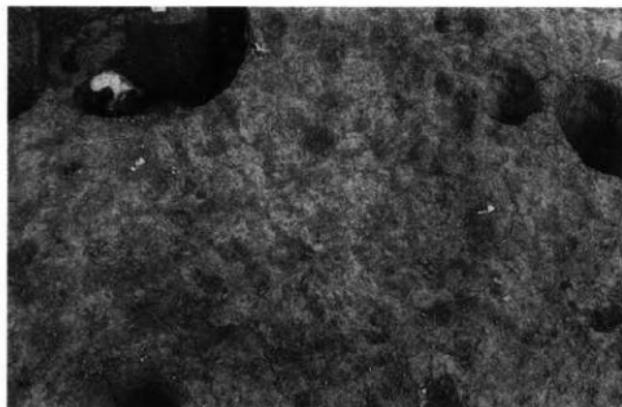
SK 17



SK 18



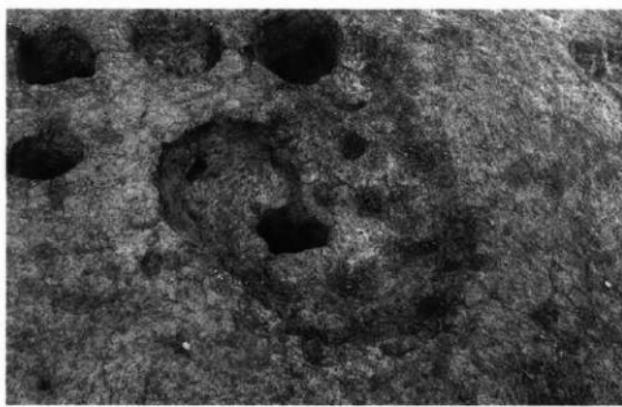
SK 19



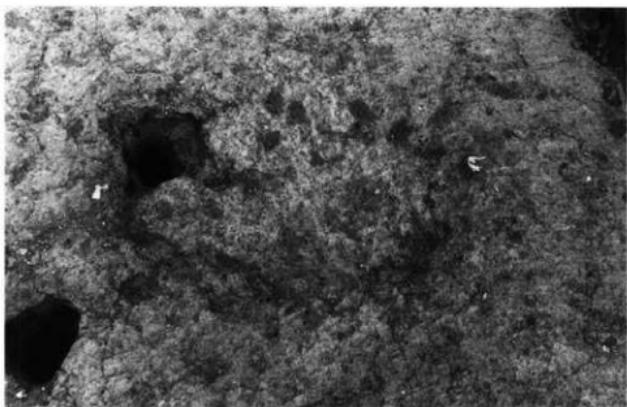
SK 20



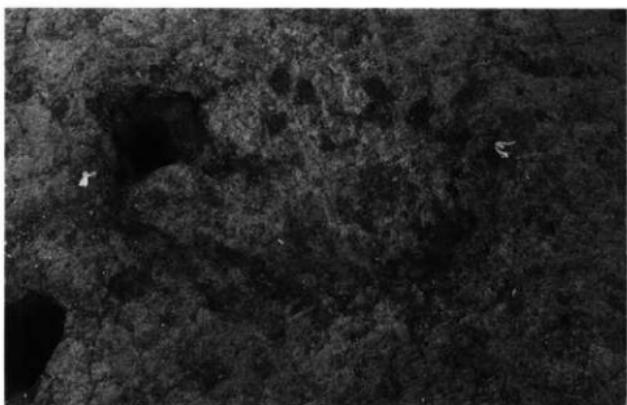
SK 21



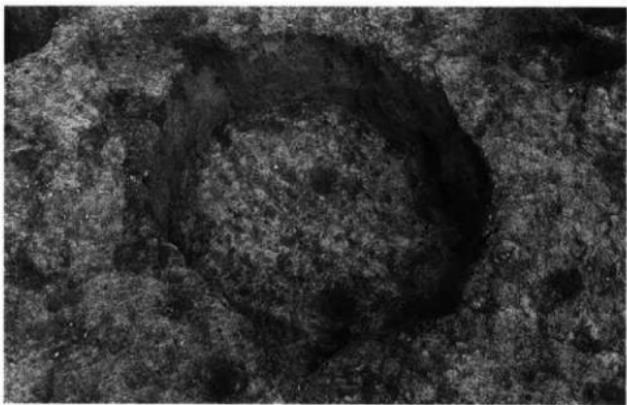
SK 22



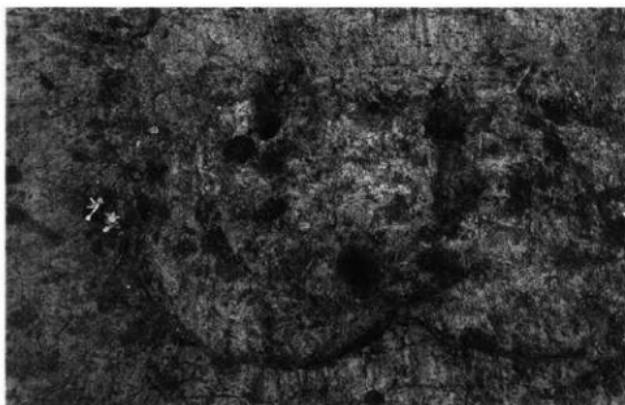
SK 23



SK 24



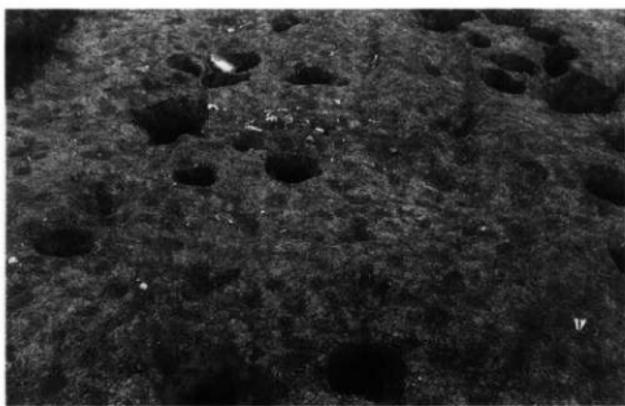
SK 25



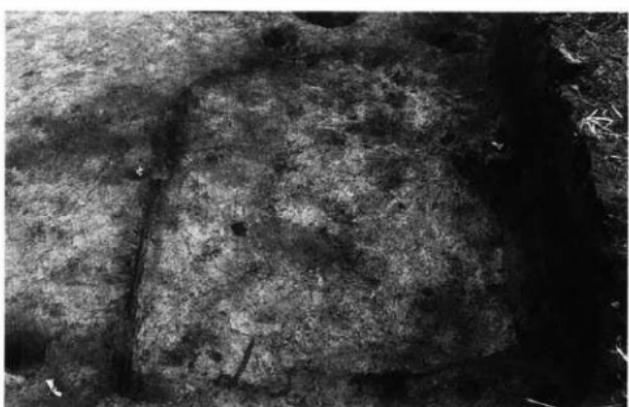
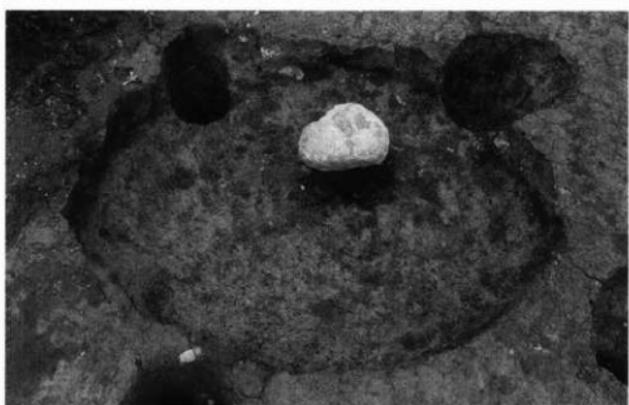
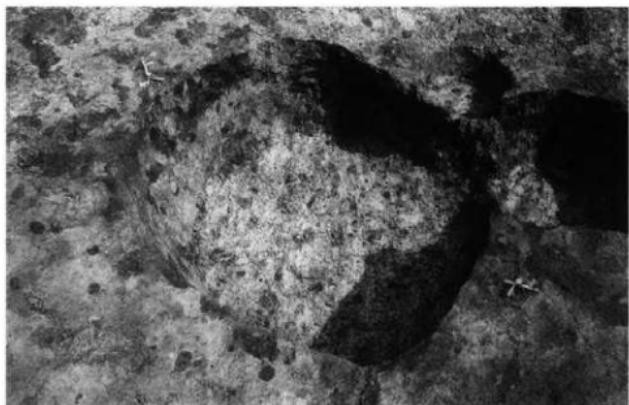
SK 26



SK 27



SK 28





第Ⅲ地区 北部全景(北から)



第Ⅲ地区 北部全景(南から)



第Ⅲ地区 南部全景(北から)



第Ⅲ地区 南部全景(南から)



第Ⅲ地区 南部全景(上空から)



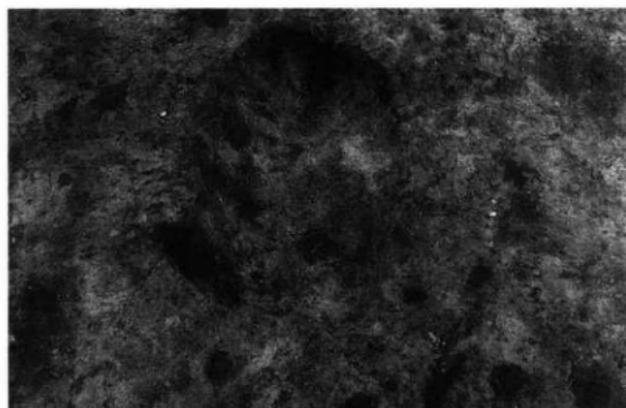
第Ⅲ地区 南部全景(斜め上空 東から)



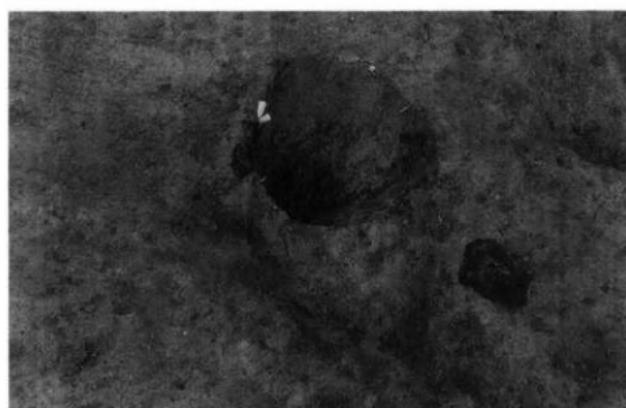
SD08 (東から)



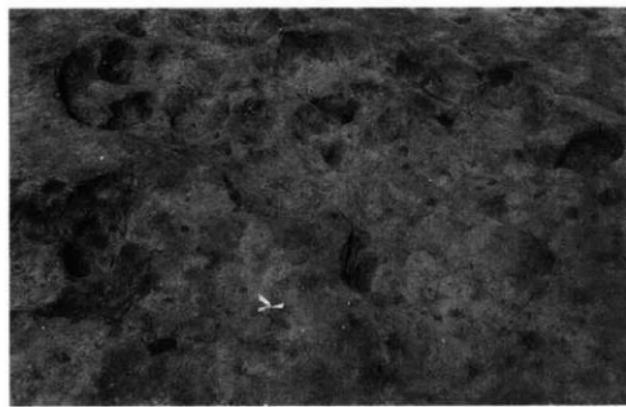
SD08 (西から)



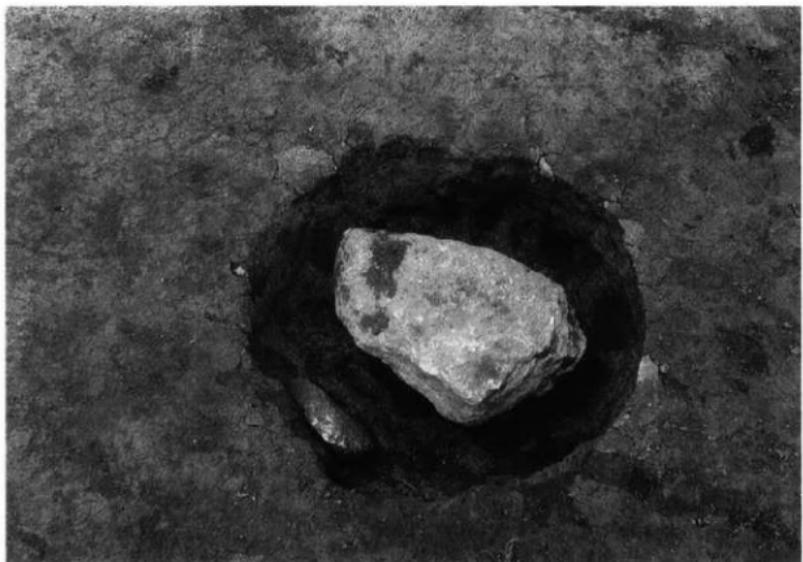
S K 3 0



S K 3 1



S K 3 2



S K 3 3



第II・IV地区 全景（南から）



第IV地区 全景（南から）



第IV地区 全景（北から）



第IV地区 全景（上空から）



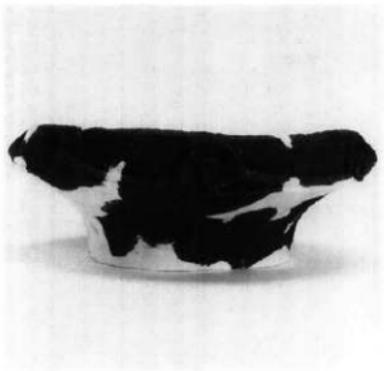
第II・IV地区 全景（上空から）



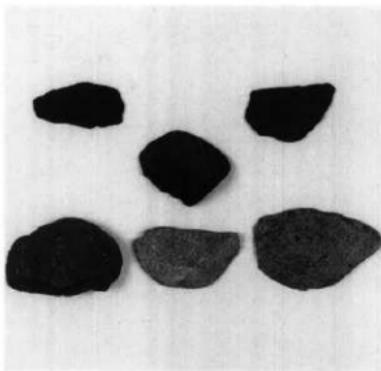
第II・IV地区 全景（斜め上空 東から）



第II・III・IV地区 全景（斜め上空 東から）



SB 01 深鉢



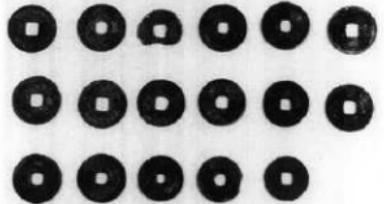
SB 01 横刃型石器



SK 22 尖頭器



SK 22 尖頭器裏面



第I・II・III地区 出土古錢



第II地区 遺構外出土鐵鎌



重機による調査区拡張スナップ



調査スナップ

報告書抄録

書名	やまもとにしだいら						
副書名	山本西平遺跡						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	山下誠一						
編集機関	飯田市教育委員会						
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL 0265-53-4545						
発行年月日	西暦1998年3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
やまもとにしだいら 山本西平	長野県 飯田市 山本	2053	35度 28分 05秒	137度 45分 25秒	1995/7/18 ～ 1997/7/25	2093	県単農道整備事 業山本地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
山本西平	集落址 居館址	縄文時代 中・近世	竪穴住居址 1軒 土坑 11基 竪穴住居址 2軒 土坑 24基 掘立柱建物址 4棟 柵列 1列 溝址 7本	縄文土器・石器 中・近世陶磁器 鉄製品・古錢	異なった台地に立 地する中世・近世 の居館址と縄文時 代の中期の集落の 一部を調査した。		

山本西平遺跡

1998年3月20日 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯田市教育委員会

印 刷 杉 本 印 刷 株 式 会 社

